

大きく外方に張り出す。中央部に浅い沈線がめぐり、その間に櫛状工具の刺突が羽状に施される。

○鉢形土器 (47)

口径9 cmの細長いコップ状を呈する。口唇部は薄く仕上げられ、低い2条の凸帯がめぐる。把手が付けられた痕が残る。底部近くはへラケズリされている。

○壺形土器 (48)

口縁部が真すぐ外方に開く長頸壺である。胴下半部は不明であるが、胴部最大幅は上半部にあり、胴長のものと思われる。

以上の古墳時代の土器の他に、歴史時代の土器が少量出土している。これらは他のグリッドより出土したものである。49は土師器甕形土器の口縁部破片で、口縁端部は肥厚し、断面三角形となる。赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。50は灰釉皿形土器の底部破片である。51～52は常滑焼の甕、鉢の破片である。

V 結 語

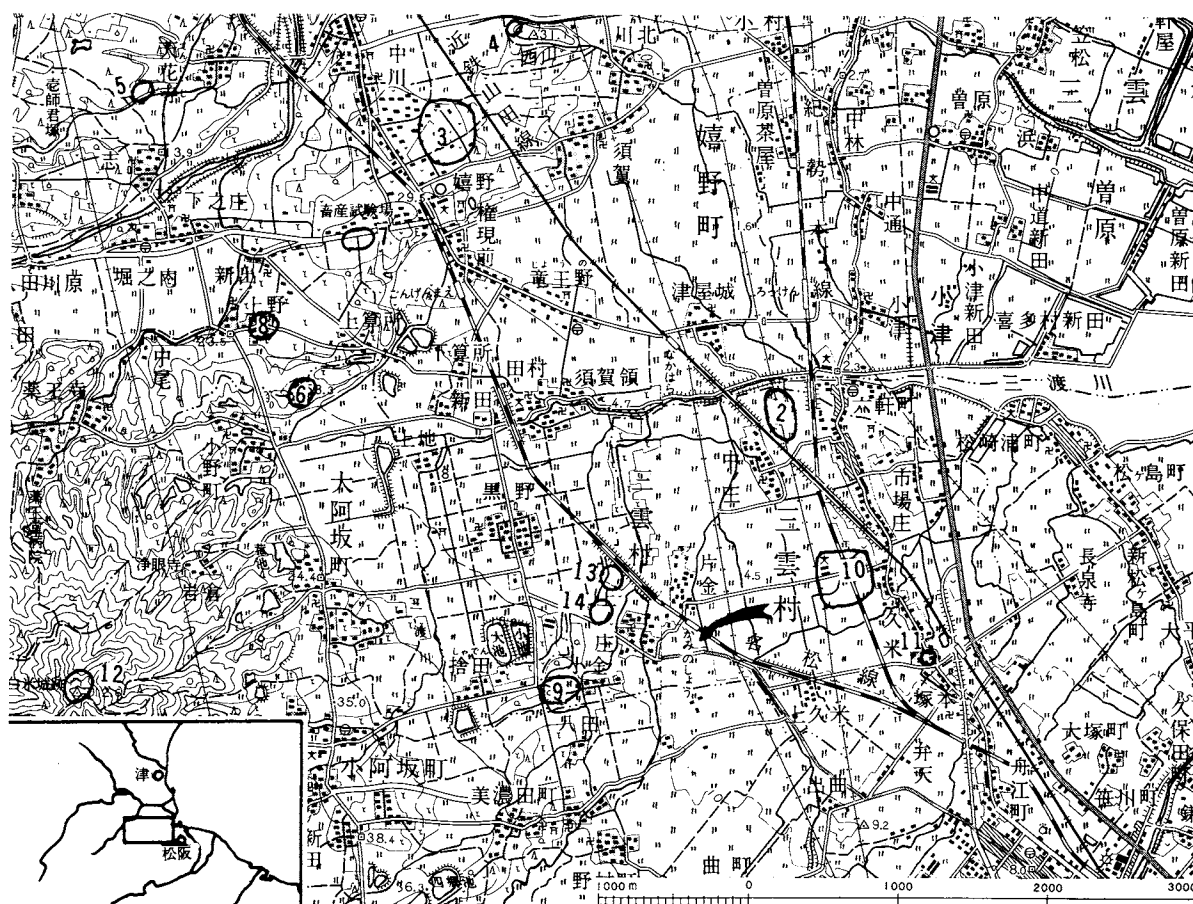
清水西遺跡は圃場整備事業にかゝる試掘調査において発見された遺跡である。排水路部分1 m幅、約30 mの調査であったため、遺跡の範囲については不明であるが、小規模なものと思われる。遺物の出土は現水田面下80 cm～1 mの暗茶褐色土および青灰色粘質土より出土している。遺構についても全く不明である。

安濃川の沖積地には当遺跡のような水田下の遺跡として、納所遺跡、森山東遺跡、竹川遺跡などがある。一方亀井遺跡のように僅かに高い現在畑地となっている個所の遺跡も存在する。当時は現在より相当起伏があったものかもしれない。それがあつた時期に埋没してしまったものであろう。

清水西遺跡は出土する遺物より5世紀後半に位置づけられる。即ち、土師器は竹川遺跡の土器より新しいものであり、須恵器については陶邑古窯址群の編年ではTK23に比定し得る。

(谷本鋭次)

一志郡三雲村・宮の越遺跡



宮の越遺跡位置図（国土地理院 1：50000 二本木・松阪）

1973

三重県教育委員会

I 前 言

宮の越遺跡は国鉄名松線上ノ庄駅の西に位置し、現在は水田と宅地になっている。その所在はすでに昭和36年8月の三重県埋蔵文化財包蔵地調査によって知られ、埴・高杯などの弥生時代後期の土器が採集されており、県遺跡台帳には県遺跡番号1797で弥生時代の遺跡として記載されている。今回、昭和47年度の県営圃場整備事業の対象地として県農林水産部から埋蔵文化財についての照会があり、それにもとづき再度の分布調査を行なった。その結果昭和36年と同様の遺物散布状況であった。そのためこの扱いについて農林水産部と県教育委員会との間で協議を行ない、遺跡の範囲、性格等を知るために試掘調査を行なうことになった。

試掘調査は幹線水路と耕土下の削平される部分とについて4 m×4 mのグリッドを12ヶ所設定して10月31日と11月1日の両日に行なった。詳細は後述するとおりであるが、幹線水路は遺跡の範囲外であり、その他の削平予定の部分については遺物包含層や遺構が深く工事によって現状がそこなわれることはないであろうという結論を得た。

調査にあたっては地元上ノ庄地区の人々の協力を得、津耕地事務所には調査後も航空写真、地形図等の提供を受けた。記して謝意を表したい。

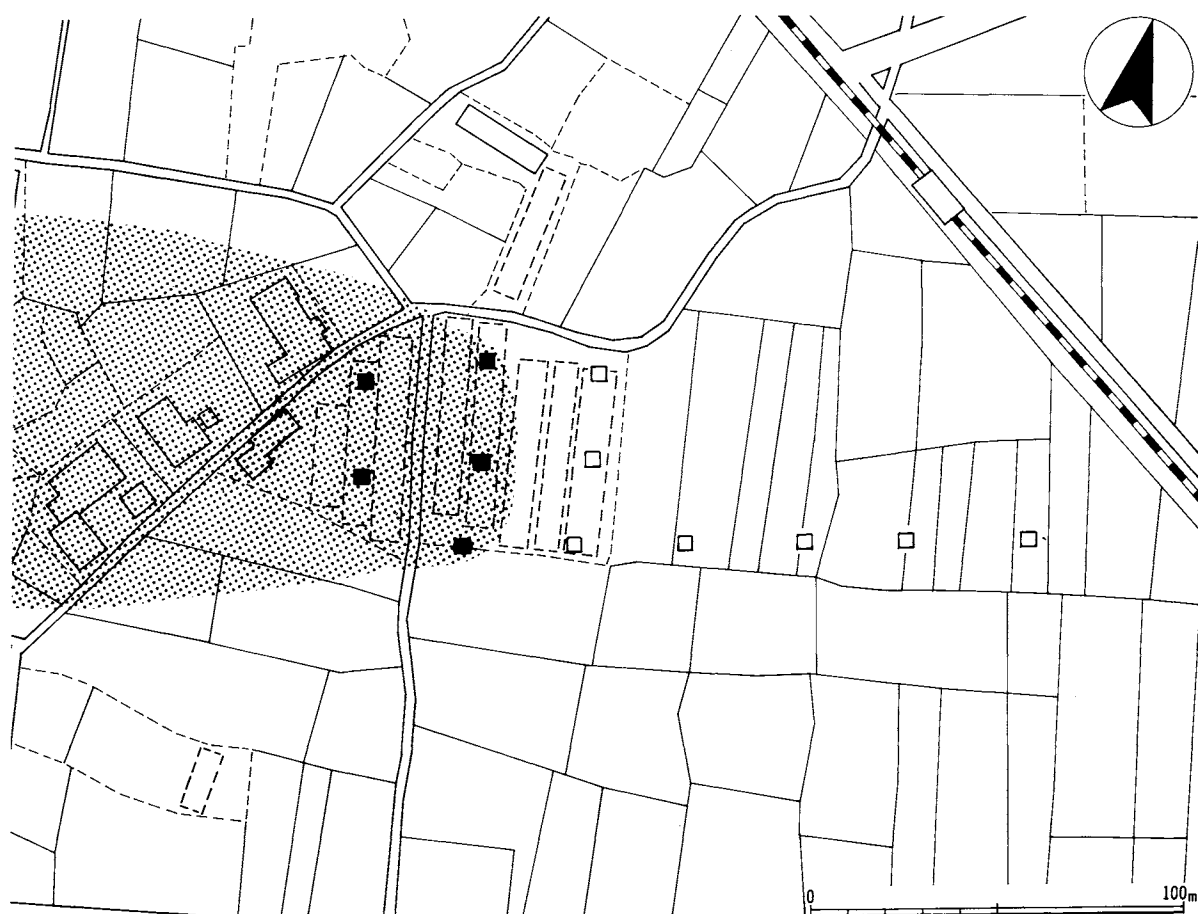


遺跡遠景（南西上空より）

II 位 置

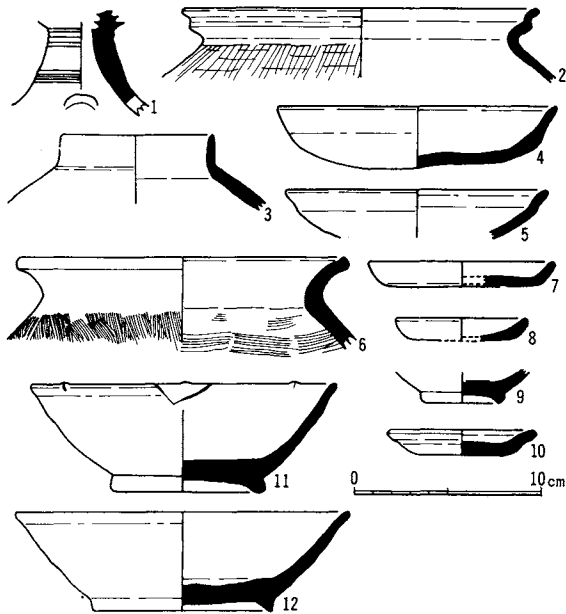
伊勢平野はその中央部で大きく東に屈曲している。この付近には後背の山地に源を発し伊勢湾にそそぐ雲出川、櫛田川の2大河川が貫流している。そしてこれらの間には南北方向に流れる多数の小河川を合流しつつ伊勢湾に流れる中河川が何本か見られる。三渡川もそのような中河川の1つである。この三渡川の南岸では鉢ヶ峰（420 m）、観音岳（606 m）の東裾の松阪市阿坂、同伊勢寺付近から北東方向にゆるやかに傾斜しつつ沖積地へと続き伊勢平野の一角を形成している。宮の越遺跡はこのような平野の中央部の水田地帯に位置しており標高は5 m前後である。

雲出川流域は伊勢平野と畿内とを結ぶ最短ルートとして古くより拓け、弥生時代前期にすでに成立していた中ノ庄遺跡(2)、権現前西方遺跡(3)などを含む多数の弥生遺跡や大規模な前方後方型の墳丘を有し古墳時代前期といわれる西山古墳(4)、筒野古墳(5)、向山古墳(6)などが所在するなど古代の伊勢平野におけるこの地域の特異性を思わせる多くの遺跡が見られる。奈良時代以後も嬉野廃寺(7)、円光寺跡(8)、大蓮寺跡(9)、大行寺跡(10)などの寺院址や久米城址(11)、白米城址(12)などの城砦址などが点在している。また上ノ庄の小区域に限ってみると前出の大蓮寺跡の他文珠遺跡(13)、辻世古中遺跡(14)の2ヶ所が弥生時代遺跡として知られている。



発掘区平面図（1：2000）

III 遺 物



遺物実測図（1：4）

出土量は全体的にさほど多くはなく、量の上では西端部付近に集中して出土している。また時期的には古墳時代前期から鎌倉時代にわたる時期の遺物が見られた。しかし図化するに至らない小破片が多かった。

特異な遺物に輪花のある山茶碗(11)がある。口径16cmを計り、口縁の一部が欠失し内側全面に厚い炭化物の付着が見られるものである。また東端部の数ヶ所の試掘坑では砂層中に平安時代と考えられる土師器の杯、皿（5・7）が混入していた。しかしこれらの遺物は流入したものと考えられ、何らの遺構も見られず、その量も比較的少量であった。

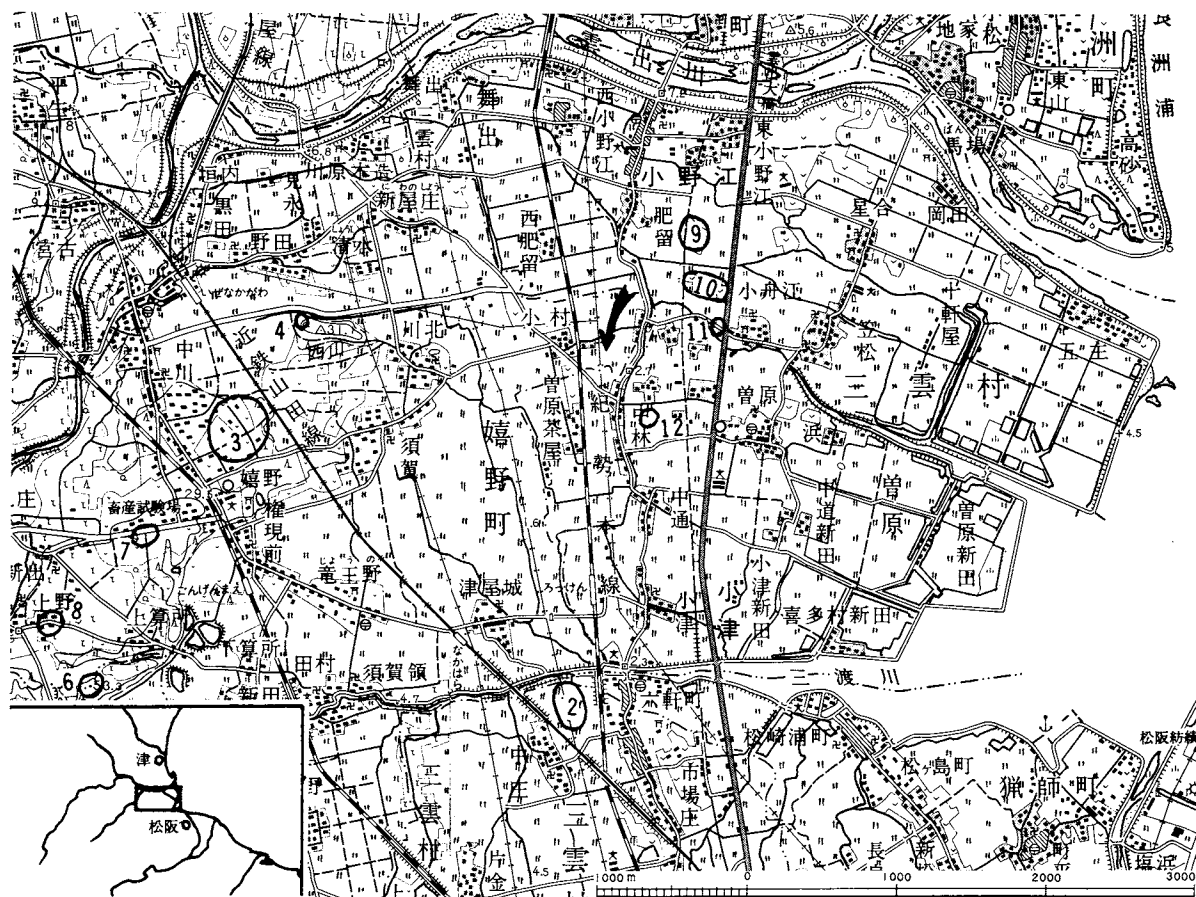
IV お わ り に

今回調査を行なった地域は標高5m前後の水田である。試掘坑は4m×4mとして圃場整備によって削平される部分と幹線水路となる部分について12ヶ所を設定して行なった。各試掘坑の基本的な層序は耕土、床土下は黄灰色砂層、続いて暗灰色粘質土または黒褐色粘土層となっている。水路敷である東半部の試掘坑ではいずれの地点でも砂層中には若干の遺物が含まれている。しかしその下層である黒褐色粘土層には全く遺物が含まれず遺跡の範囲外と考えられよう。

一方西半部の各試掘坑では前出と同様黄灰色砂層には鎌倉時代の土器片を含む。しかしその下層は暗灰色粘質土層となっており比較的多量の土器片の他木片などの植物遺物を含んでいる。この地点は湧水が激しく、完掘することができなかったためこの土層が何らかの遺構か自然流路の埋没土なのか包含層であるのかは明らかではないが遺跡の範囲内の一地点として宮の城遺跡の東限を示しこの西にある現在の上ノ庄の集落のある地域に広がるものと考えられよう。

以上のように宮の越遺跡は古墳時代から鎌倉時代にわたる遺跡であり、現在の上ノ庄集落の下に広がる範囲をもつであろうことが明らかになった。今後中世村落の形態や中世村落と現在の集落との関連などの問題が検討されるにあたって多くの資料を提供する重要な遺跡であるといえよう。
(吉水康夫)

一志郡嬉野町・小村遺跡



小村遺跡位置図（国土地理院 1：50000 二本木・松阪）

1973

三重県教育委員会

I 前 言

今回調査を行なった小村地区は昭和47年度県営圃場整備事業の当初計画には含まれていなかったものであるが、他地区との振り換え対象地として追加され、11月初旬に当地の埋蔵文化財についての照会があった。これにもとづき11月13日に現地踏査を行なった。その結果事業対象地内に点在するまわりの水田との比高差50cm前後の小規模な畑はいずれにも土器の散布が認められ、水田も含めてこの付近に大規模な遺跡が存在する可能性のあることが明らかとなった。そのため県農林水産部と県教育委員会との間で協議を行ない、当地区の遺跡の有無、その性格、範囲などを確認するため試掘調査を行なうことになり11月20日から24日まで実施した。その成果は後出のとおりであるが、国鉄紀勢本線の東側に3ヶ所の遺跡のあることが明らかとなった。

そこでこの試掘調査の結果をもとに11月25日津耕地事務所との間で再度の協議をもち、工事によって遺構に影響を及ぼすと思われる事業対象地の東南の水路敷について延長約340mにわたって再度調査を行なうことになり、11月27日より30日までの4日間実施した。しかし巾の狭い水路敷という条件のため遺構などは明らかにすることができなかった。

調査に際しては地元小村地区の人々、津耕地事務所等から種々御協力いただいた。記して謝意を表したい。



遺跡遠景（南西上空より）

II 位 置

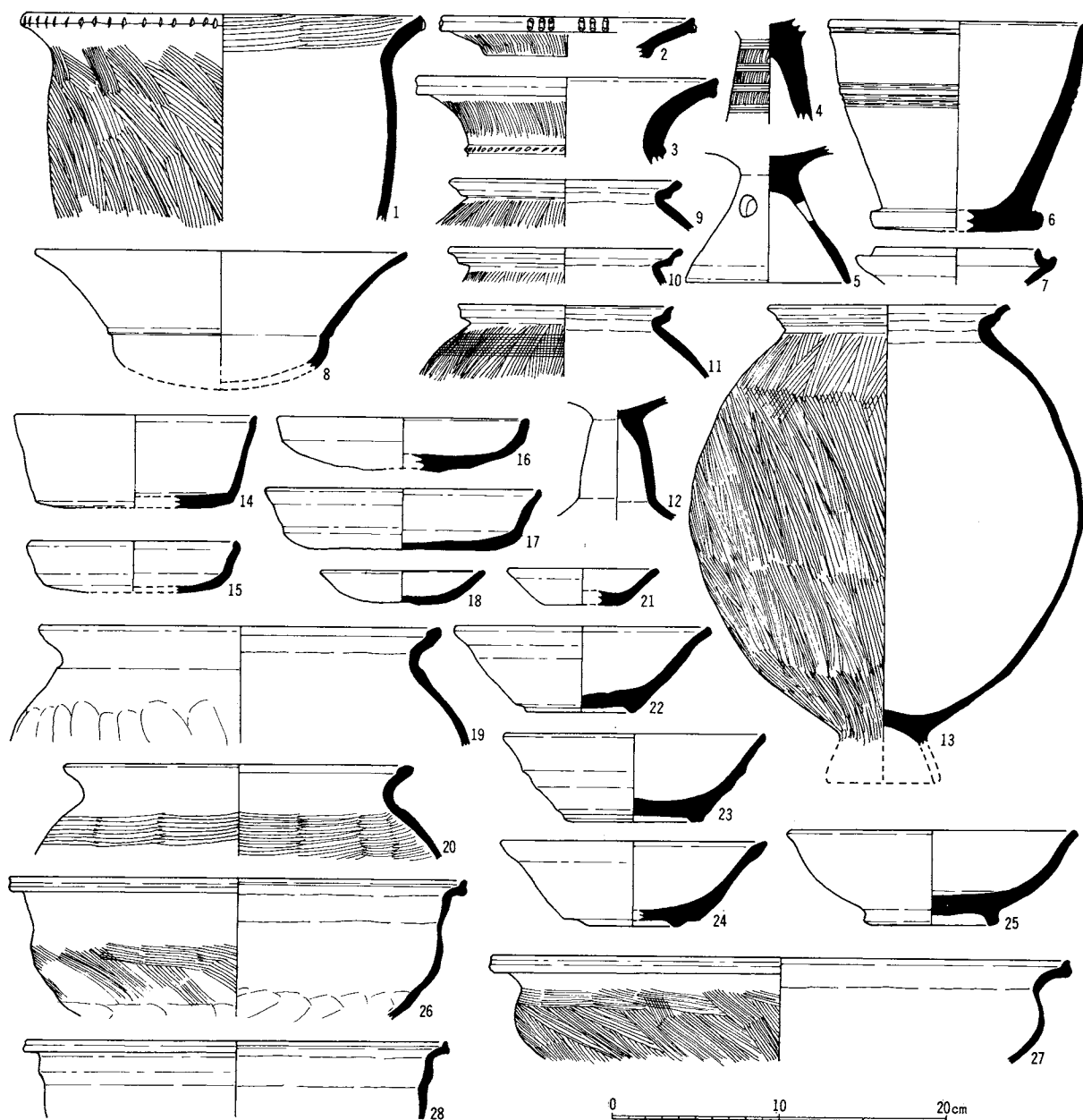
小村遺跡は前出の宮の越遺跡の北約4kmで、雲出川と三渡川とのほぼ中間あたりの国鉄紀勢線と旧参宮街道とにはさまれた水田地帯に位置する。前出の上ノ庄地区とは三渡川の北側になるものの地形、環境の上ではほぼ類似したものといえよう。また小区域に限って見ても前期の前方後方墳である西山古墳(4)は当遺跡の西4kmにあり、松本遺跡(9)、権現前遺跡(11)、西宮貝塚(10)、寺前遺跡(12)など多数の弥生時代遺跡、貝塚がわずか1km前後の範囲に点在している。



遺跡地形図 (1 : 5000)

III 遺 物

小村遺跡は3地区に分れ、各地区の出土遺物はA地区(2・4・8・9・11・12)、B地区(1・5・13)、C地区(6・7・10・14~28)となっており、全体では弥生時代中期から室町時代の各時代のものがあるが、A・B両地区では弥生時代から古墳時代前期に限られる。またA地区では木片などが見られ、C地区の一地点では掘立柱の柱根も見られた。



遺物実測図 (1 : 4)

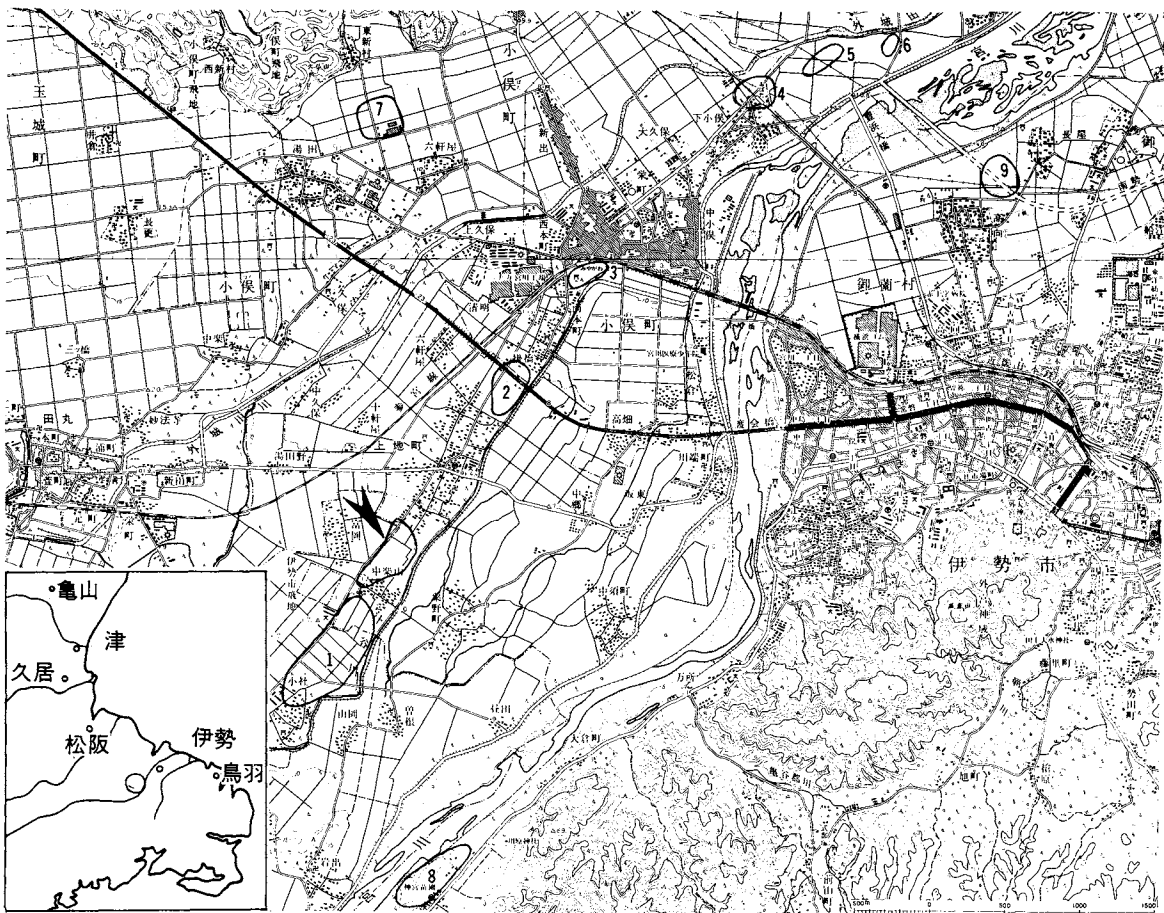
Ⅳ おわりに

今回の調査は圃場整備事業対象地全域に37ヶ所の試掘坑を設定して行なった。その結果3地区の遺跡が確認された。そしてA地区とB地区とでは弥生時代から古墳時代の遺物のみが見られ、C地区では室町時代に至る遺物が見られた。これは弥生時代から古墳時代にかけては3個の小単位によって集落が形成されていたものか、小地域での移動が行なわれたものかは現段階では資料不足で断言できない。そしてその後C地区に定着あるいは3小単位が結集し室町時代に至るのであろう。

今後の調査でこのような疑問が解明されることを期待し当遺跡の重要性を強調したい。

(吉水康夫)

伊勢市上地町・中楽山遺跡



中楽山遺跡位置図（国土地理院 1 : 25000 : 明野・伊勢）

1973

三重県教育委員会

I 前 言

度会郡玉城町から伊勢市にかけての宮川左岸流域の低地及び低位段丘の農地を対象とした県営玉城第2地区圃場整備事業が県農林部の手により開始されたのは昭和42年であった。着手当時、事業計画地内の遺跡の所在は知られず、三重県遺跡地図にも記載されていなかった。ところが、事業が低地から段丘面へと進捗するにつれて、遺跡の所在が判明することになる。45年度、事業は度会郡玉城町小社集落の東北に隣接する低位段丘東端部分に及んだ。たまたま、その年に県教育委員会が中南勢地域の遺跡分布調査を実施しており、玉城町、伊勢市は当然その範囲に含まれていた。そこで、調査員が事業に伴う幹線排水路工事による排土中に弥生時代後期土器片を多量に発見した。これが、宮川左岸段丘上で最初に確認された弥生時代遺跡であり、現在、小社遺跡と呼称されている。

この発見により、小社集落と中楽山集落の間が対象地域となる46年度の事業の実施に当っては、担当事業所の伊勢耕地事務所は県教育委員会に対して計画地内の遺跡の有無の確認を依頼してきた。そこで、灌漑水路が埋管される部分に限って10箇所試掘したところ、弥生時代後期の高杯などが多く出土した。しかし、埋管のための掘削深度が浅く包含層に達しないため、事業に差し支わりがないと判断した。

このように、45・46年度と低位段丘東縁の事業地に遺跡が確認され、しかも、47年度も同様な地形の、伊勢市中楽山、同上地、玉城町富岡の3集落に囲まれた地域が事業対象地になったため、まず8月1・2日の両日、県立松阪商業高校教諭奥義次氏に47年度事業計画地内の遺跡分布調査を依頼した。そうしたところ、後章で触れるA地区に当る部分と県道を挟んでA地区と向い合う富岡集落東の高所の畑の部分で土器片の散布が確認された。この事実をもとに11月9日に関係者が現地立会し両所で試掘を実施したところ前者で多量の土器片の出土を見たが、後者では何も検出されなかった。そこで、前者A地区を遺跡の一部と判断し、その範囲を確認するため、改めて2m×8mの試掘坑12箇所を設定し、11月14・17日に試掘を行なった。その結果、No.2・4の試掘坑に竪穴住居址が、No.1・6に遺物包含層が確認されたが、他の試掘坑では何も検出されなかった。竪穴住居址、遺物包含層が確認され、確実に遺跡の一部と考えられる約2,500㎡の部分は、A地区でも最も高い位置を占めるため、事業計画では削平して低位面まで下げる予定であった。そこで、県教育委員会は伊勢耕地事務所に事業計画を変更して削平せず、遺跡を改変しない処置をとることを要望した。その結果、事務所及び土地改良区の尽力で幸いA地区2,500㎡は削平される運命をまぬがれることが出来た。

A地区での遺構の発見によって、事業地内の他の部分でも同様なことがあり得ると予想されたため、県道東側の段丘東縁部分の排水路掘削工事の際には、関係者が現地立会することになった。12月8日、現地立会の機会がもたれたが、幹線排水路部分は一部県道寄りが着工されていた。す

で、その工事で、壺棺片を始めとして多くの土器片が排水路部分に散らばっており、直ちに工事を中止して、未着工の残る排水路部分延長 130m を 8・9 日の両日試掘した。内延長 60m 部分—B 地区—に遺構、遺物包含層が確認されたので、幅 5 m、面積 300m² を 12 月 13 日から発掘することにした。B 区の調査と併せて、A 地区の試掘調査で確認された竪穴住居址 1 基を完全に発掘することにした。また、幹線排水路に直交する東側の小排水路部分—D 地区—も同時に試掘を 10 箇所行ない、遺構・包含層の確認されたところのみ、排水路敷内に限定し掘り広げることになった。12 月 13 日に現地に来てみると県道両側の小排水路部分—C 地区—はすでに工事が行なわれ、掘削は済んでいたが、その壁面にも竪穴住居址の断面が見事に現れており、出土遺物は土地改良区事務所に保管されていた。

このような経過を経て、とにかく 12 月 27 日に調査を終了したが、相つぐ遺構・包含層の発見で、調査が後手、後手に廻った感は否めない。それにしても、当初予想したより遺跡の規模は大きく、県道西側の一部を含む県道東側の段丘東縁の大部分に広がっていると予想される。しかも、遺跡の広がりが推定される部分は、地形的に段丘上でも高い所であり、高い部分は事業による表土扱い—耕土直下の床土（地山）を削り取って耕土を埋め戻し均す工事方法—される場合が多いため、遺跡の一部が破壊されてしまった可能性もある。

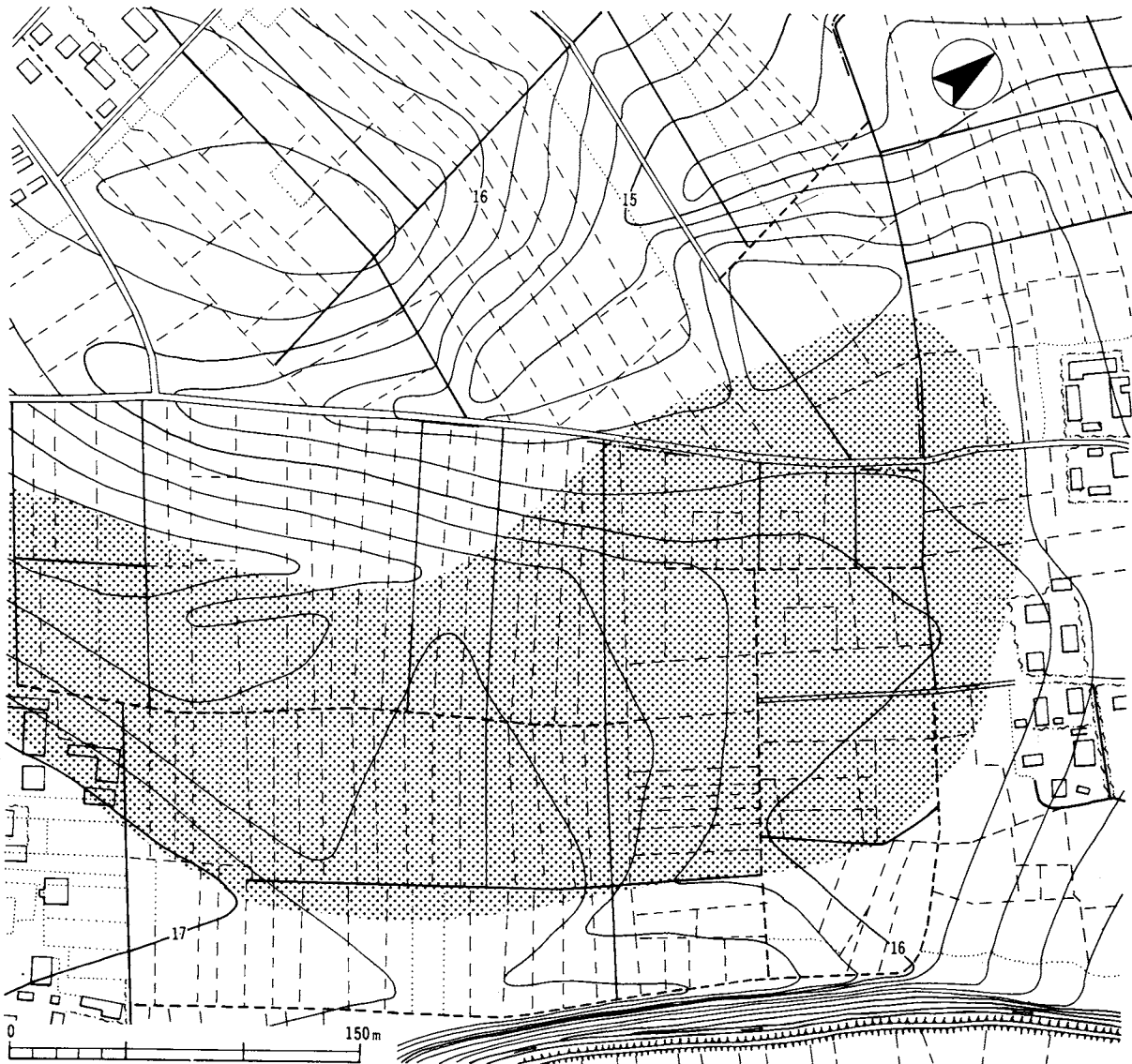
なお、調査を進めるに際しては、伊勢耕地事務所及び土地改良区事務所の方々に種々御配慮を頂いた。又、株式会社森組及び区長中村比八氏を始めとした地元上地町の方々の御協力も得た。明和町教育委員会青木進主事及び中森成行氏（現在熊野市立神上小学校勤務）にも何かとお世話になった。記して謝意を表したい。



遠跡遠景（東方上空より）

Ⅱ 位 置

伊勢市川端町、度会橋のたもとで国道23号線から分岐して玉城町田丸へ抜ける県道飯南線がほぼ東西に走り、伊勢市上地町でその県道から、さらに分岐して玉城町小社に向って南々西に別の県道が延びる。中楽山遺跡はこの県道を西限とし、伊勢市上地町の集落と上地町に属する中楽山の集落に囲まれた地域にほぼ該当し、行政上は伊勢市上地町に属する50,000m²以上の規模を擁する大遺跡と想像される。地形的には宮川左岸の低位段丘上にあつて、標高15.4～17.0mを計る。段丘の東縁は急な崖となり、度会郡小俣町で宮川に注ぐ小流汁谷川が裾を洗う。汁谷川と宮川の間は標高7～10mの沖積地で、現在段丘東縁と宮川左岸堤防との最短距離は1,250mほどあるが、かつては宮川の河道は一定せず、段丘裾を洗うこともあった^①。この段丘の西端には外城田川が流れ、段丘自体は北々東方向の小俣町へゆるく傾斜しながら延びている。



遺跡地形図（1：3000） 網目：遺跡範囲

現在、宮川左岸地域の中楽山遺跡周辺で確認されている遺跡は、すべてこの低位段丘上に所在し、宮川左岸沖積地では現在のところ遺跡は発見されていない。しかも、段丘上の遺跡はほとんど段丘東縁部分に集中し、南から小社^②・中楽山・野垣内^③・離宮院址^④(3)・袴田(4)・大藪^⑤(5)・うるし原遺跡(6)と南北に連なる。

大藪遺跡に於て縄文時代早・晩期及び弥生時代前期の土器が少量出土しているものの、他の遺跡では現在確認されていない。小社・野垣内・大藪遺跡といずれも歴史時代の土器及び遺構を伴うとは言え、弥生時代後期を主体とする遺跡である。

宮川左岸段丘上の遺跡の盛況に比較して、右岸地域は極端に少い。中楽山南方対岸の佐八遺跡^⑥(8)は縄文時代遺跡であり、右岸沖積地の高向遺跡^⑦(9)は平安時代遺跡であって、現在のところ宮川流域の沖積地に所在する唯一の確な遺跡である。

III 遺 構

1. A 地 区

標高16.8mの等高線が県道に平行して舌状に延びる部分をA地区とし、2m×8mの試掘坑12箇所をあけた。うち、No.2・No.4坑で竪穴住居址、No.1・No.6坑で土壇状遺構を検出したが、事業によって改変を加えられなくなったので、No.4の竪穴住居址のみ完掘した。

(1) 弥生時代後期後半の遺構

竪穴住居址

いずれも欠山期の土器が埋土中及び床面より出土した。

S B 1 東西辺6.3m、南北辺6.4mを計る、ほぼ正方形プランを有する竪穴住居址であり、南北軸がN 30° Wの方向をさす。耕作土面から床面までの深さは75～80cmほどで、礫を含む粘質赤褐色土の地山を30cm掘り下げ、床面は三和土のように固くしまり、中央3ヶ所に焼土が見られた



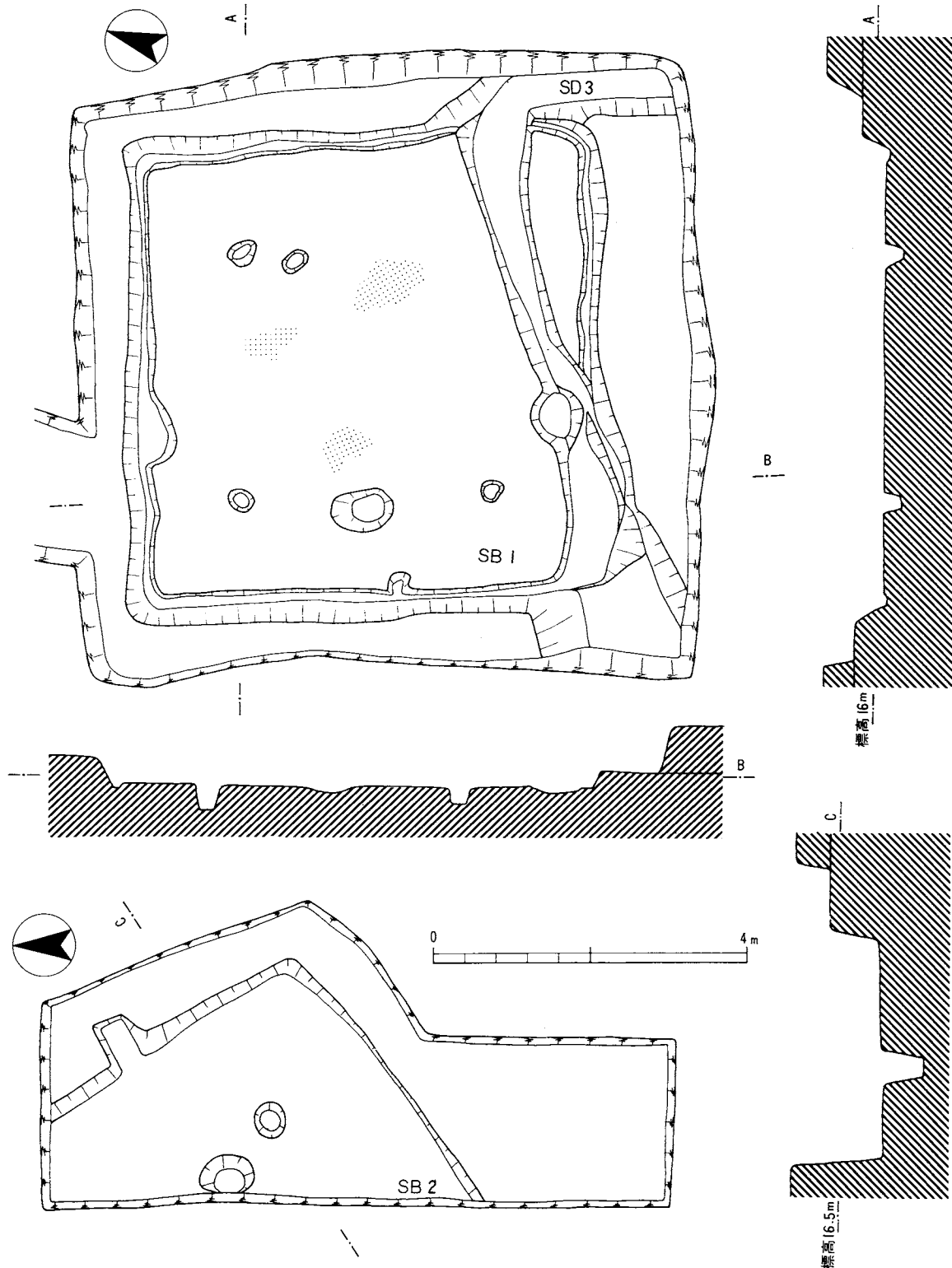
遺跡遠景（北より）



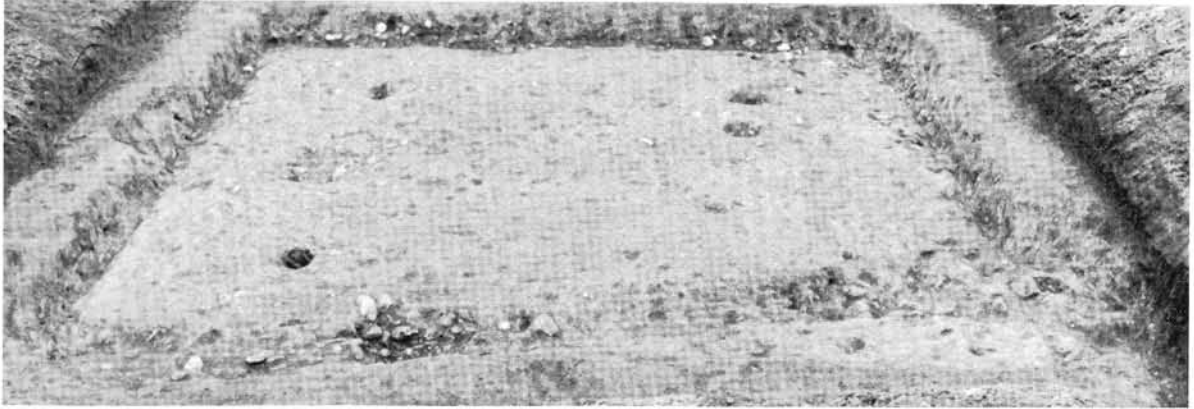
発掘区平面図（1：2000）実線：現況、点線：計画、横線：表土扱い部分
 斜線：遺構・遺物包含層確認部分



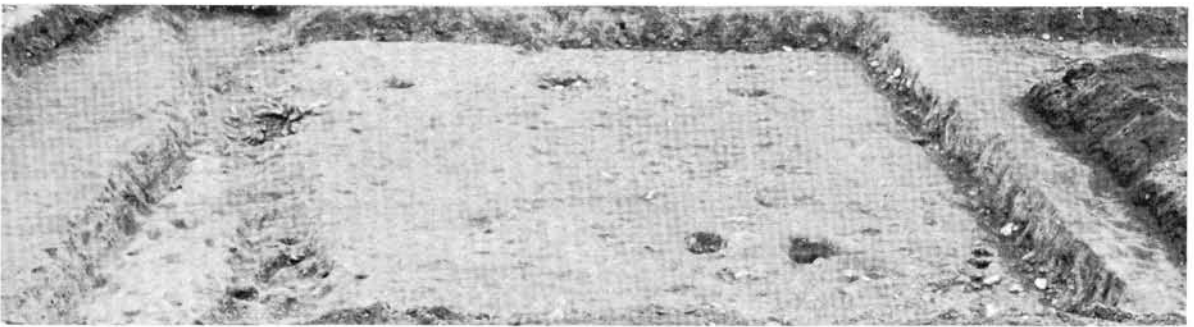
が炉は切っていない。壁下の四周に幅15~20cm、深さ5cmの浅い溝がめぐり、南壁の中央よりやや西壁寄りに径70×80cm、深さ30cmほどの長円形の穴があき、貯蔵穴と考えられる。西壁寄り主柱穴間の同様の穴は深さ12cmと浅い。主柱穴は径30~35cm、深さ25~30cmで断面U字形をなし、南東隅の主柱穴を欠くが、柱間は東西、南北とも3.2mである。住居址南西隅から南東隅にかけて古墳時代後期の溝址SD3が走り、住居址の一部は切られているが住居址南壁は辛うじて残っ



A区遺構実測図(1:80) 網目:焼土



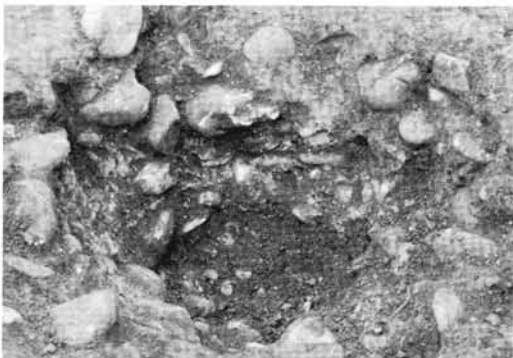
SB 1 (南より)



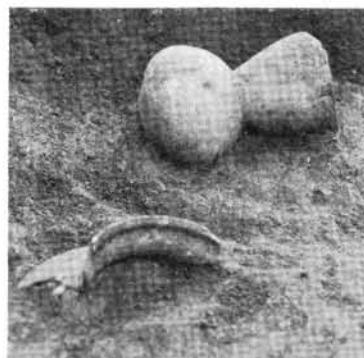
SB 1 (東より)



SB 2 (東より)



SB 1 貯蔵穴



土器10・17出土状況



土器51出土状況

ていた。

S B 2 発掘したのは南東隅部分のみで、全形は不明であるが、S B 1 と同様の平面プランを有していると考えられる。耕作土表面より床面までの深さ 1.1m、地山面の切り込みも60cmとS B 1 より深い。床面はS B 1 のように固くしならず、礫が多数顔を見せていた。床面レベルをS B 1 と比較するとS B 1 は標高15.87m、S B 2 は標高16.23mとS B 2 が高いが、S B 2 がA区で最も高い箇所にあることを考えれば当然の数値である。

主柱穴を1箇所検出したが、径45cm、深さ50cmを計り断面U字形をなす。主柱穴のすぐ隣りに径50×70cm、深さ40cmほどの長円形の穴が掘られていた。住居址壁面下には周溝は検出されず、S B 1 とこの点構造が違う。なお、東南隅に高杯の脚部(51)が床面に接して押しつぶされていた。

(2) 古墳時代後期の遺構

溝 址

S D 3 S B 1 の南西隅から南東隅や、北寄りの東壁の一部を切り、南へカーブする。全掘していないので、どのように溝が走るかは不明であるが、発掘した限りでは方形周溝址の一部と想像される。溝底幅は一定せず 0.5～1 mあり、地山面を30～40cm掘り下げている。S B 1 南西隅に当たる部分で溝底より遊離して須恵器杯(39)が出土した。

2. B 地 区

A地区から直線距離にして北々東へ 220mの幹線排水路敷を便宜上B地区とし、幅 5 m×延長 60mを発掘調査した。発掘箇所はゆるく傾斜しながら北へ延びる16.40mの等高線部分に当り、東側は等高線がくびれている。発掘の結果、方形周溝墓4基の他、溝址・土壇が検出された。

(1) 弥生時代後期前半の遺構

土 壇

S K 19 発掘区東南隅にあり北半部の遺構とかけはなれている。全掘していないが東西径4.5 mの不整形な土壇で、深さ10cmと浅い。

溝 址

S D 18 遺構群の南端にあり、発掘区を斜めに切る形で南北に走る。肩幅50cm、溝底幅20～25cm、地山面を15cmほど切り込み、北がやや高い。

(2) 弥生時代後期後半の遺構

方形周溝墓群

排水路内の調査であるため、全容は知りえないが4基確認できる。いずれも赤褐色土の地山面を掘って周溝とし、S X 1 とS X 4、S X 2 とS X 4 が1辺を共有しているようであり、S X 1 とS X 2 とは隣り合うが辺を共有する関係にはない。S X 3 とS X 4 は互いにコーナーを切り合って一部重複している。なお、切り合いの先後関係については不明である。また、これらの南北軸はS X 1 とS X 2 がN 40° W、S X 3、S X 4 は、N 25° WからN 30° WでS X 1 とS X 2 と

や、異なる。周溝内は黒色土で埋まり、陸橋部は発掘範囲では検出されなかった。周溝に囲まれる方形の区域はS X 1でごく一部、S X 4で $\frac{1}{2}$ ほど地山面まで下げたが、盛土及び埋葬施設について明らかにすることは出来なかった。

S X 1 周溝東辺と北辺の一部を発掘したにすぎないが、東辺外法はS X 4の周溝北辺の外法に連なり切り合っている。切り合う部分で外法が明かに西へカーブすることから、外法で計って周溝東辺は13.5mとなる。周溝の肩幅は2.0~2.5m、溝底幅は北辺が狭く1m~1.6m、東辺が2mほどである。深さは地山面から計って東辺で40cm、北辺では東から西へと深く40~75cmである。土器は北辺周溝に積み重なって多量に埋れており、下層の土器でもいずれも溝底から20cm以上遊離していた。出土状態から溝に遺棄されたものと考えられる。東辺周溝内は土器の出土は少量であり、S X 4と切り合う南コーナーでは甕形土器片がかたまっただけ出土したが、どちらのものとも判断しなかった。

S X 2 発掘は西辺周溝のみであるが、南北の長さ11m、幅1.5m、溝底幅1m、深さ30~40cmを計る。周溝南コーナーはS X 4と切り合い辛うじて溝底線が残っていた。南、北の周溝コーナー部分でS X 1と比較して少量ではあったが一群の土器片が出土した。

S X 3 南コーナー部分のみで、南辺周溝と西辺周溝の一部を明らかにしたにすぎない。したがって一辺の長さは不明であるが、周溝幅0.8~1.2m、溝底幅0.4~0.7mとS X 1・S X 2と比較して小さく、深さは20~25cmほどある。

S X 4 東側半分を調査したのみであるが、周溝幅0.8~1.2m、溝底幅0.3~0.8m、深さ0.2~0.25mとS X 3とほとんど同様の数値を示す。外法で計った南北の長さは約10mである。周溝で囲まれた平坦部地山面は北がやや高い。

細長い土壇S K 5があって完掘していないが、地山面よりの深さ85cm、南壁では段がついて傾斜している。墓壇として認めがたい形状をなす。なお、S X 3とS X 4が切り合う部分で高杯132が出土したが、どちらのものとも判断がつかない。

土 壇

S K 10 長さ2.7m、幅0.6m、深さ0.2mの弧状の溝状土壇で、壺形土器128と高杯形土器127が溝内に埋れていた。

壺 棺

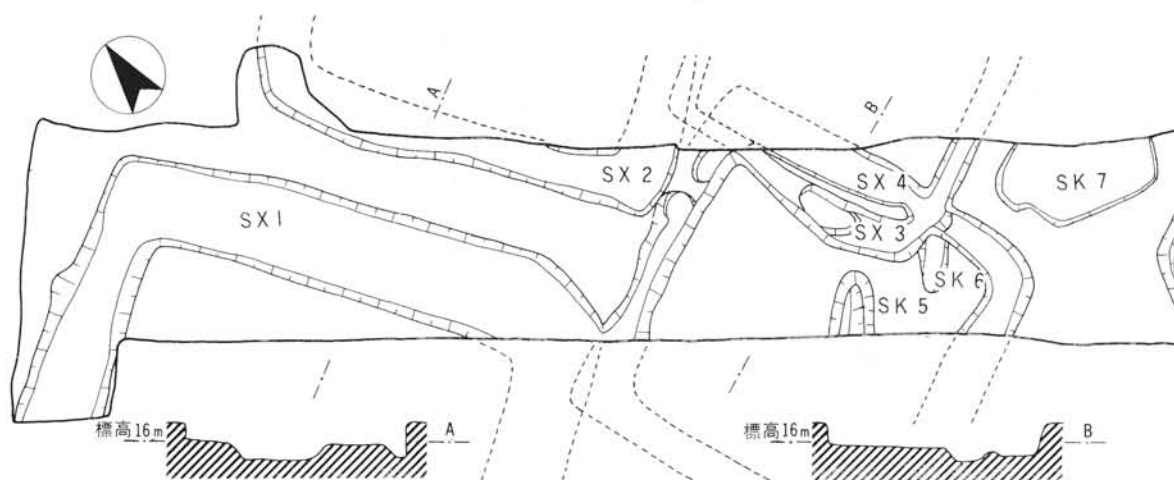
S X 20 土壇S K 8の北肩に、底部を南にして壺形土器下腹部が横転していた。残存長50cm、腹径50cmと大形の壺形土器を使用している。同様な壺形土器の下腹部大形破片がB区発掘区北端から北へ80mの幹線排水路敷内で検出され、それには人骨が付着していた。このことから壺棺と推定したが、蓋に当るものは見当らなかったし、墓壇も検出されなかった。壺形土器自体はブルトナーによる削土のため、横転した器体の半分以上を削り取られており、取上げの段階で粉々に破碎してしまった。



B区発掘区（西より）



B区発掘区（東より）



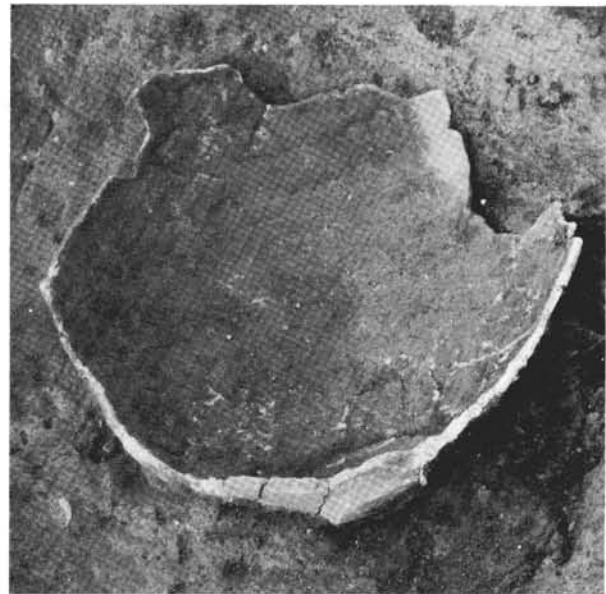
B区発掘区実測図（1：200）



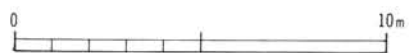
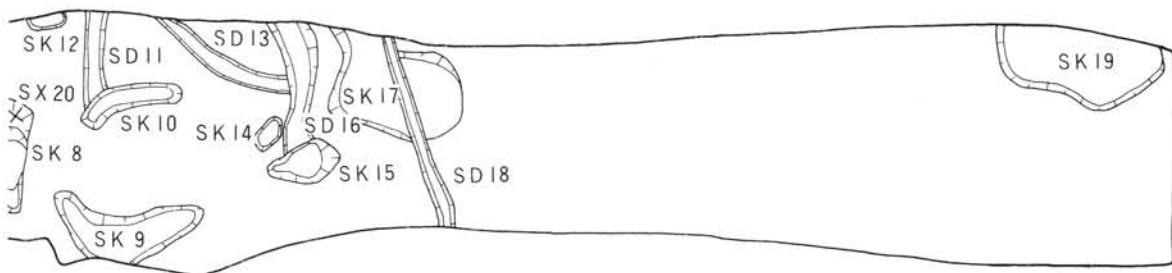
B区発掘区（東より）



土器53出土状況



SX 20



(3) 時期不明の遺構

遺物が伴わないか、あっても遺構内埋土に含まれず、埋土上層に少量包含される遺構群で土坑と溝址がある。

溝址 (SD 11・SD 13・SD 16) SD 11・SD 13は幅50cm、深さ10cmの溝幅がほぼ一定した溝址である。SD 16は50cm～1mと溝幅が一定せず、SK 15と切り合う部分で深さ20cm、東端で30cmと東が低くなる。

土坑(SK 5・SK 6・SK 7・SK 8・SK 9・SK 12・SK 14・SK 15・SK 17) すべて不整形をしており、地山面からの深さはSK 6・7・9・12・17が20cm以下であり、SK 5・8・15は50cmを越える。

3. C 地区

小排水路の西壁面と、灌漑水路を埋管するため掘削した壁面(発掘区平面図C地区斜線部分)に少なくとも4基の竪穴住居址の断面を観察できた。弥生時代後期前半の土器は、小排水路部分の掘削工事中に採集されたものであるが、恐らく壁面断面に現れていた竪穴住居址埋土中に包含されていたと考えられる。

4. D 地区

No. 4 とNo. 10の試掘坑で遺構を検出した。

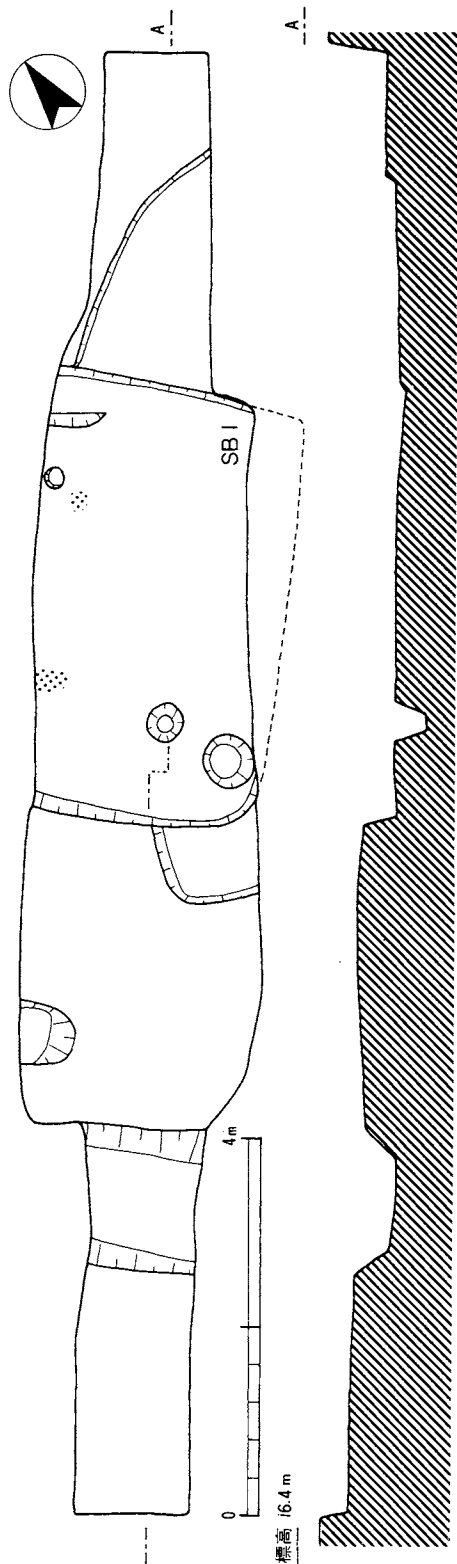
(1) 弥生時代後期後半の遺構

竪穴住居址

SB 1 No. 10の試掘坑で検出されたものであり、全掘していないので全容は不明であるが、方形プランを有するものである。南北軸はN 40° Wを指し、東・西壁を検出し、壁下には周溝はめぐらない。東西壁の間隔は4.6mで、地山面から床面までの深さは西壁で37cmを計る。東壁の肩は削平され、深さは5cmほどしかない。床面は三和土のように固くしまり、2箇所床面が焼けていた。主柱穴は対角線上に2箇所検出され、北の主柱穴は径20cm、南のは径40cm、深さはともに40cmほどである。南のコーナーには径60cm、深さ50cmの円形の穴があって、貯蔵穴と推定される。

(2) 古墳時代後期の遺構

No. 4 の試掘坑で径1.4m、深さ30cmほどの円形の土坑が検出され、その土坑内に土師器189～192がかたまって出土した。



D-10区 実測図 (1:80)

Ⅳ 出土遺物

1. A 地 区

(1) 弥生時代後期後半の土器

S B 1 より出土したものが大半を占め、器種としては壺形土器・高杯形土器・甕形土器がある。中でも高杯形土器の出土量が多い。

広口壺形土器

A 類 (1・3～5・8) 口端部分と上腹部に文様が施されるもので、球形の器体に、外反する口縁部をつける。口端は肥厚して稜をもち、8は下へも肥厚する。文様は櫛描文と篋圧痕文で、口端に櫛描列点文を施し(1・3・4)、1は上腹部に横線文と列点文を交互に配し、列点文は横線文を挟んで羽状に施されている。5は口端部を篋圧痕文で、内面を羽状に、外面を斜格文状に飾り、上腹部には櫛描横線文と篋圧痕文を交互に施し、さらに横線文に櫛描孤文を配している。施文も1と比較して鋭く丁寧である。8も5と同様、口端外面を篋圧痕文で羽状に飾っている。

B 類 (40) 胴のよく張る球形の器体に、短い口頸部がつき、頸部に1条の突帯をめぐらすもので、文様は施されない。

C 類 (6・41) 文様を持たず、下腹部が張り、重心の低い器形で、6は短く外反する口頸部をもち、器体は41と比べ扁平となり、上げ底である。

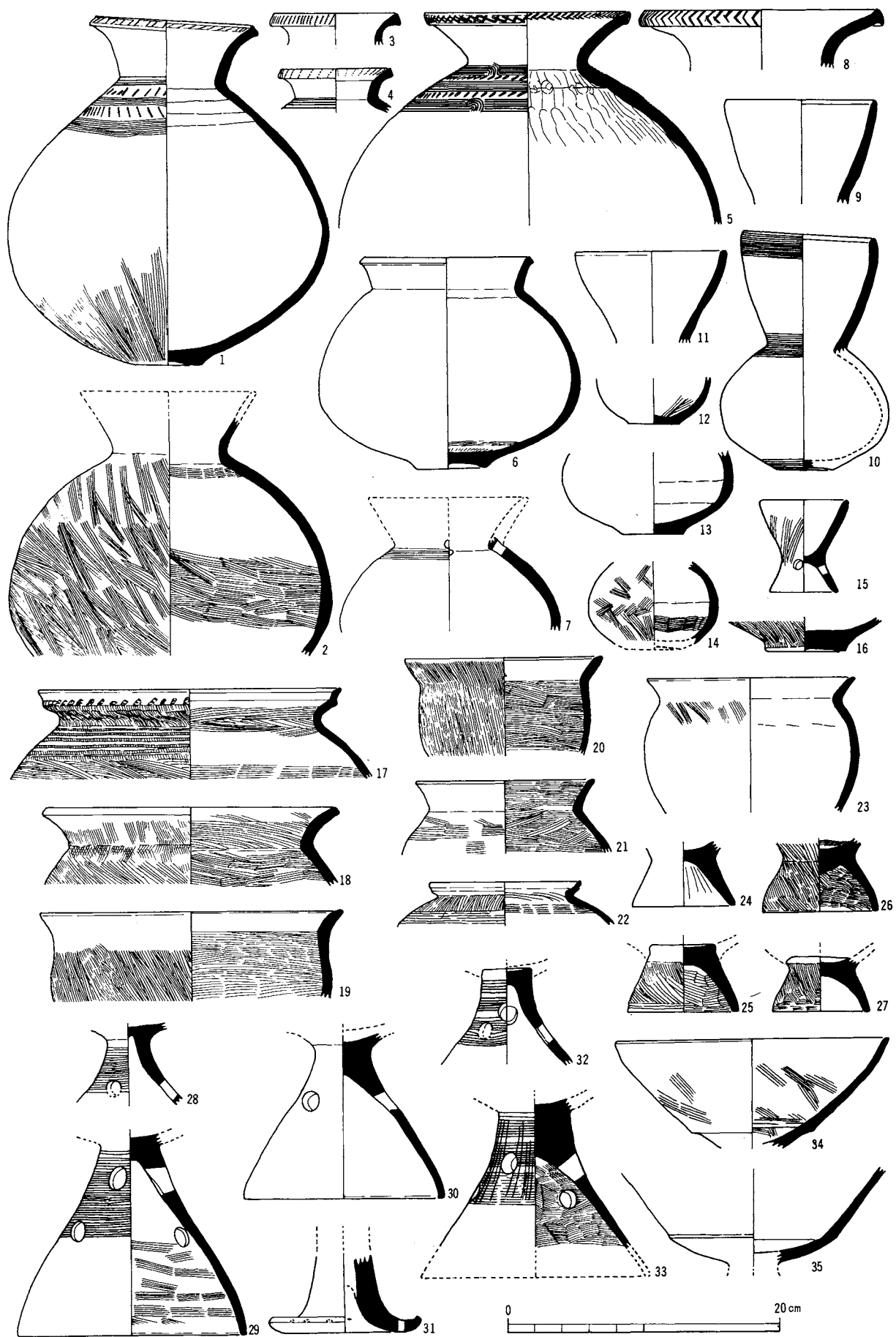
なお、2・42も無文であるが、42は算盤玉のように器体が張り、2は1のような器形であろうが、調整時の刷毛目が器面に残る。7は、細かく篋研磨され、頸部に円孔があげられている。

長頸壺形土器 (9～14)

10は唯一の完形品で、口径10cm、器高17cm。体部は広口壺形土器と共通し、胴が張って胴部最大径が口径を上回り、重心は下がる。口頸部は器高の $\frac{1}{2}$ の長さを有し、口縁部は内わんし、口端は丸くおさまる。タテ方向に器面を篋で研磨して仕上げており、口縁部、口頸部から体部へ屈曲する部分、底部と3段に雑な、細かい櫛描き横線文を施している。なお、口縁と上腹部との一部に朱が残る。この種の器形は、調整仕上げが丁寧で、器面を篋で研磨するのが特徴であり、9・12・13にもその特徴を見ることが出来る。

高杯形土器

A 類 (29・30・37・38・51) 脚高が10cmを越え、29・51は14cmほどある。脚裾が直線的に広がらず、内わん気味に丸味をもつもので、欠山式土器に特徴的な高杯である。脚高が大きい29・51は2段三方の透孔をもち、脚高が約11cmと小さい他のは、1段の三方透しである。杯部の形態は恐らく44のように稜が入って底部と口縁部分が明瞭に区別出来るものであろうが、この種のものは44より1回り大きく、そして深いと考えられる。



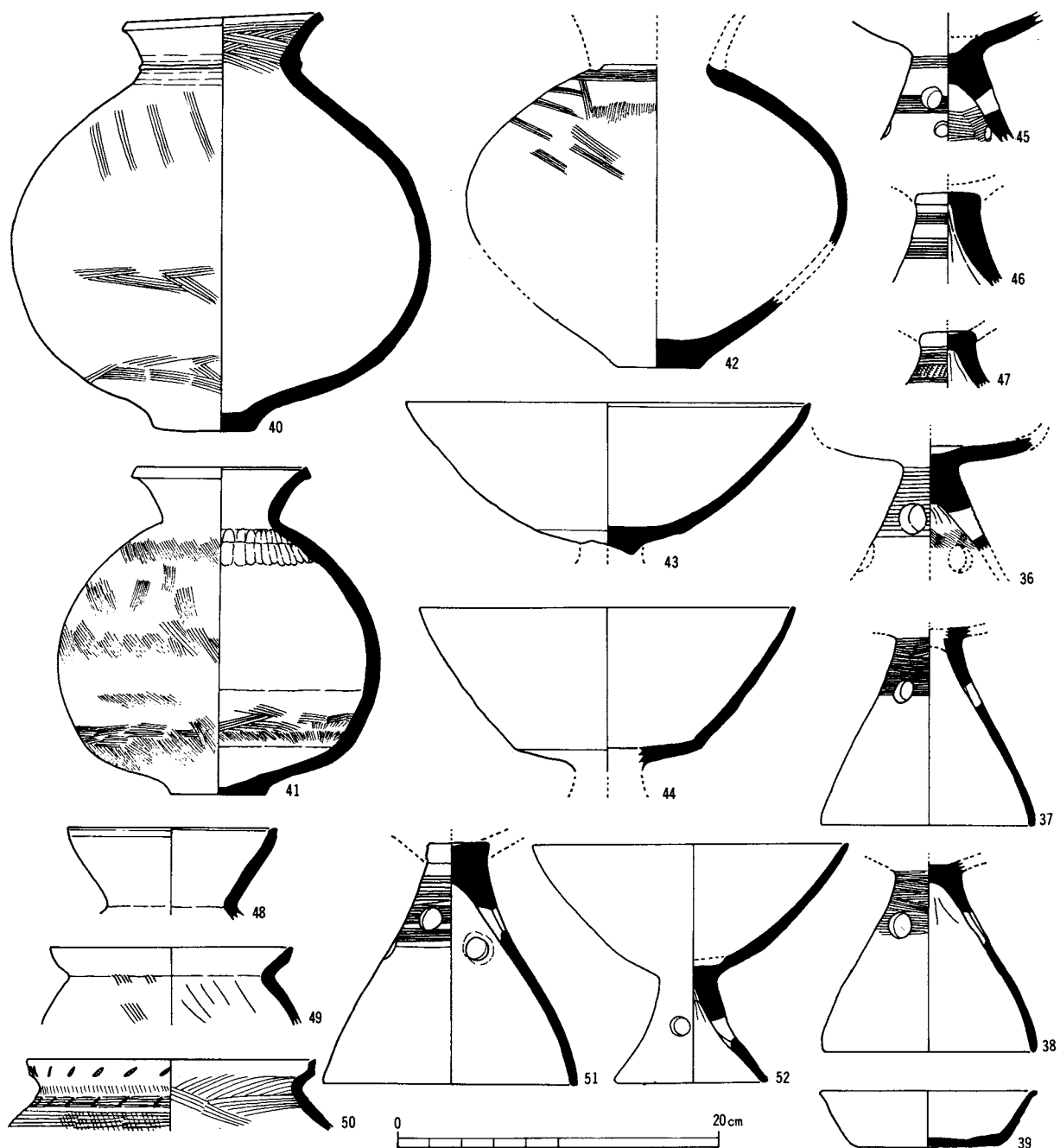
A区SB1 出土土器実測図(1:4)

B類(33) 脚部のみでしかも裾を欠く。大きさはA類とほぼ同じであるが、脚裾はA類のように内わんせず、直線的にひろがり、2段三方に透孔をもつ。

C類(52) 脚高がA類高杯の半分で、透孔の高さの部分で屈曲して、脚裾が広がる器形で、杯部は底部と口縁部の境がなくなり、八の字形に開く。

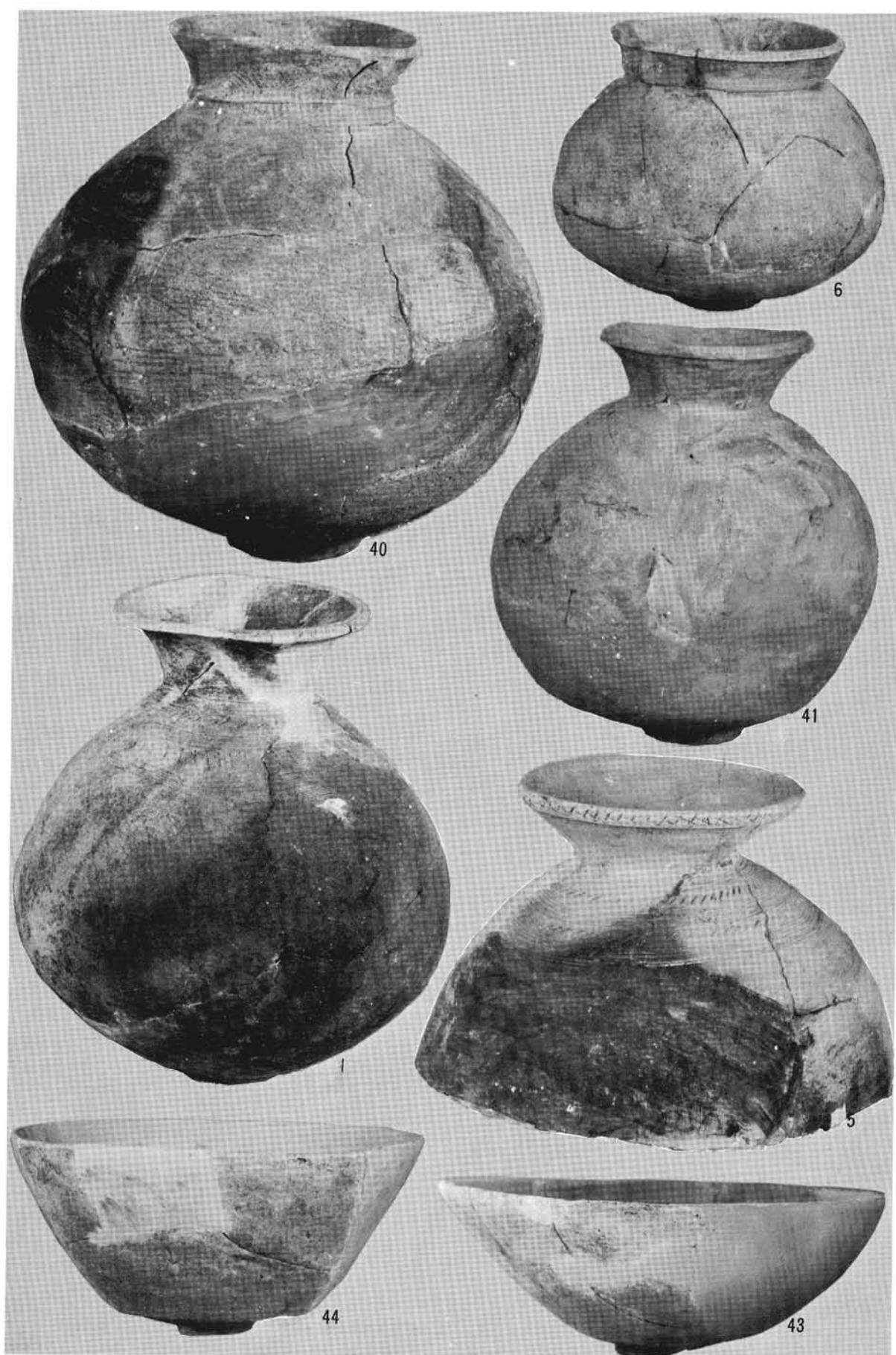
D類(31) 脚部のみで杯部は不明である。広がった脚裾の端部が上へ反り、脚裾に径0.5cmの円孔を垂直にあげ、その残存状態より円孔は10個以上はあったと考えられる。

なお、28・32・36・45～47は脚部で、いずれも脚裾を欠くが、脚高は10cm以下と推定され、ほとんどは脚部上半を櫛描横線文で飾り、3方に円孔をあけている。中には横線文の間に列点文を



A区出土土器実測図(1:4)

SB1:36~38、SB2:48~51
No.1坑:40~47・52、SD3:39



A区出土土器 (1 : 3)

施すもの(47)、2段に円孔をあけるもの(32・36・45)もある。また34・35・43・44は杯部のみで、どのグループの脚部へ帰属するかは不明であるが、杯部は底部と口縁部との間に稜が入って角張り区別が明瞭なもの(44)と口縁部から底部への移行が滑らかで区別がつかず八の字形に直線的に開くもの(43)、その中間的なもの(34・35)とがあり、口径は20～25cm、深さは8～9cmほどである。

甕形土器

A類(17・22・50) 複合口縁をもつもので、22は口縁部をヨコにナデただけのものであるが、17・50は口縁部に篋圧痕文を施している。

B類(18・21・23・49) 「く」の字形に外反する口縁部をもち肩が張り、口径は肩幅より小さい。

C類(19・20) 口縁部はB類と同様であるが、肩がなくなり、器体の最大径が口縁にくるもので、器面には細かい丁寧な刷毛目が施されている。

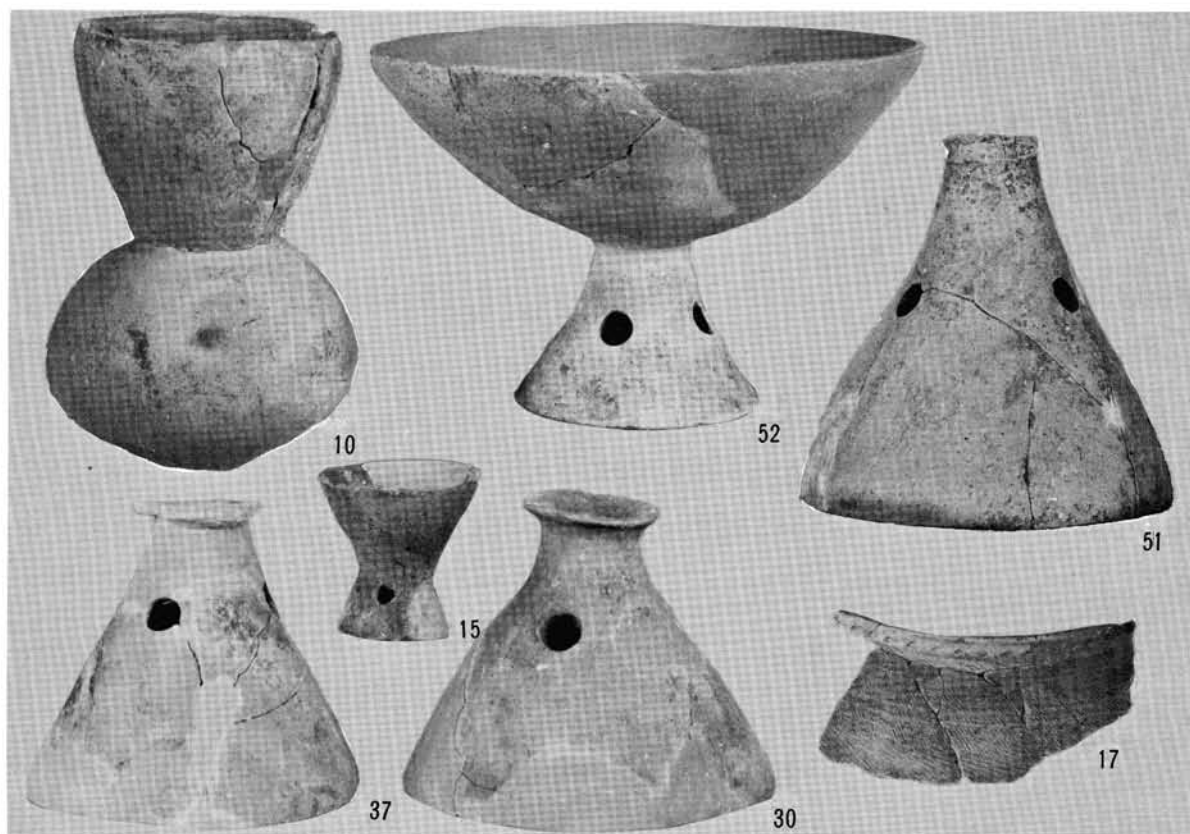
なお、24～27は台部であるが、24を除いて刷毛目がつき、内側に帯状部分はない。

台付鉢形土器(15)

器高8cmほど、鉢形部分と脚部は同じ形をなし、脚部には円孔が三方にあき、外面を刷毛目、内面をヨコにナデで仕上げている。

(2) 古墳時代の土器

須恵器杯1点のみで、しかもSB1中より出土したが、出土箇所がSB1のコーナーを切るSD3上であったため、SD3に伴うものと考えられる。



A区出土土器(1:3)

杯 (39)

径13.5cm、口縁部は逆八字形に開き、口端がわずかに外に反る。底部は篋で切り離したまゝで調整を加えていない。他はヨコに丁寧になでている。

2. B 地 区

S X 1 の出土土器が大半を占め、S X 1、S X 2、S K 10の出土土器は弥生時代後期後半の欠山式にあたるものであり、S D 18・S K 19及び発掘区北端より 130mはなれた、幹線排水路敷内の地点出土土器は弥生時代後期前半の寄道式に相当すると考えられる。

(1) 弥生時代後期前半の土器

壺形土器 (129・130・135・137)

口縁端部が肥厚して稜を有し、130は蓋受けの円孔があき、篋圧痕文が羽状に施されている。137は口端に篋で凹線が引かれ、内面に増状突起が配されている。135は器体が算盤玉のように張り、上腹部を櫛描横線文と波状文で飾り、横線文には半載竹管文であろうか、2本1対の縦の直線文が入る。

細頸壺形土器 (136)

口端が内わんし、袋状口縁をなすもので、頸部は刷毛目調整が施されている。

壺用蓋形土器 (131)

天井部を欠くが笠形をなすもので、ナデで仕上げており、2孔1対の円孔が二方にあくものである。

高杯形土器 (132・132)

いずれも杯部のみで、口縁部が外反し、口縁部と底部との境に稜が入って、底部は直線的に脚部に続く器形である。

針形土器 (134)

器体下半部を欠失するが、口縁の外方への張り出しが長い浅鉢形をなすもので、口端に篋圧痕文がつき、刷毛目で仕上げている。

甕形土器 (138～140)

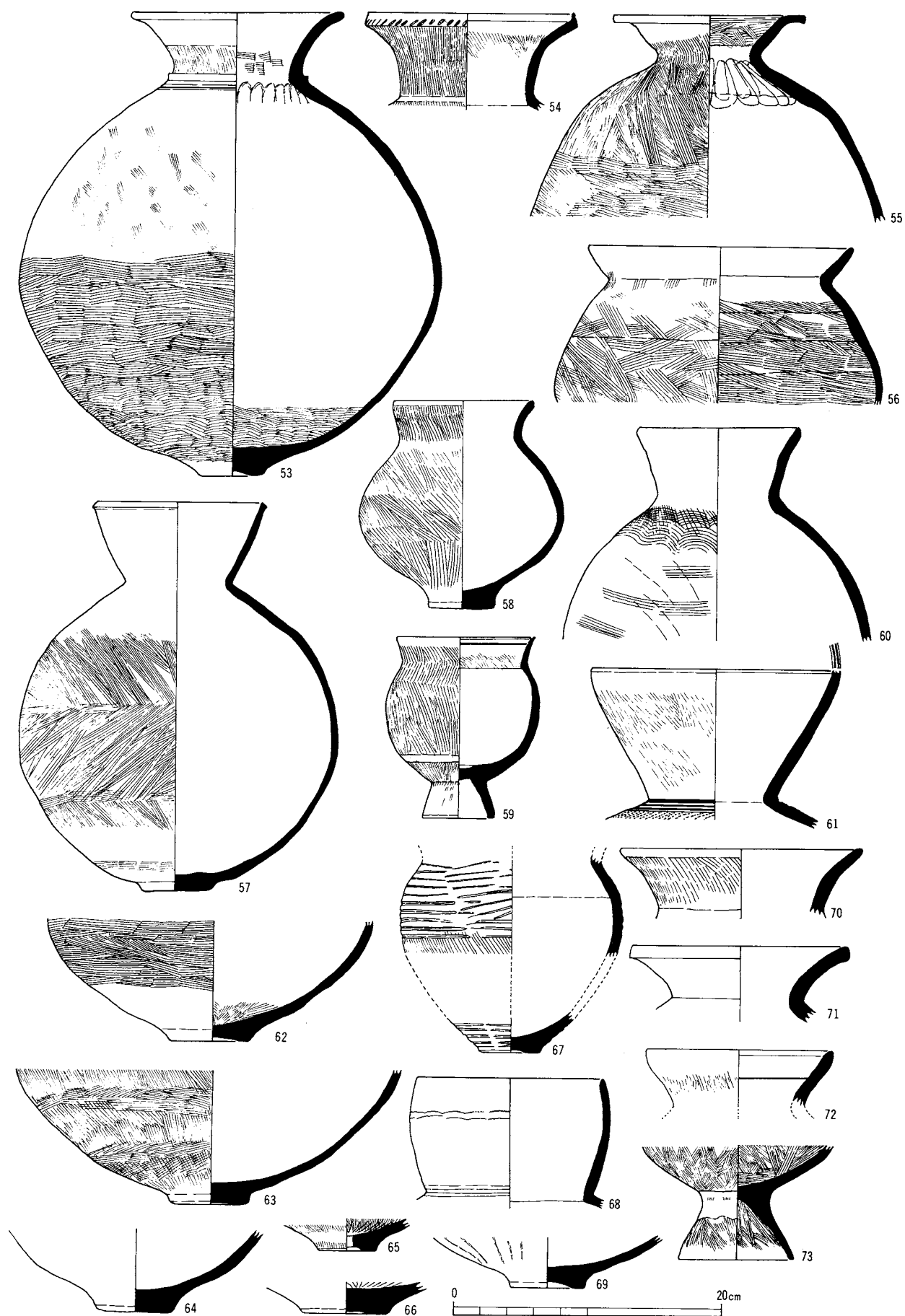
いずれも「く」の字形に屈曲する短い口縁部をもち、140は水平に屈曲する。138・140は口端に篋圧痕文を施し、138・139は刷毛目で仕上げているが、140は肩の部分に2本の篋描沈線を施し、その下には刷毛目が残る。

(2) 弥生時代後期後半の土器

広口壺形土器

A区広口壺形土器C類に相当する器形は見られないし、A類に相当する器形も118の口縁部破片1点にすぎない。

A類 (118) 口端部が下へ肥厚して、内外面に篋圧痕文が施されている。



B区SX1出土土器实测图(1:4)

B類(53) A区40の器形と比較して、口頸部がよく発達して大きく外反し、体部も球形に近い。上腹部は刷毛目の上を篋で削っているが、下腹部には横方向の刷毛目が残し、底は上げ底になる。下腹部に同様の手法を残す壺形土器として62がある。

D類(57・60) 口縁部分が外反せず、口頸部が逆八字形に開くもので、57は球形の体部に円板状の底部がつき、薄手作りである。60は上腹部に櫛描波状文が施されているが、形がくずれた粗雑なものである。

E類(54・120) 口頸部のみで、頸部が直立して口縁部が外反するもので、54は口端が上に引き出されて面をもち、その外面に篋圧痕文が施されている。

F類(55) 「く」の字形に外反する口頸部をもち、口端は水平に外へ張り出して、肩が張る器形である。

G類(58) 口頸部はゆるく外反し、底部が発達して胴部最大径と器高がほぼ同じ数値を示す。器面は刷毛目で仕上げられている。

H類(70~72) 「く」の字形に外へ開く口頸部をもつもので、口端部分は肥厚していない。

I類(128) 口頸部がどの壺形土器よりも強く外反し、体部中央がよく張る無文の器形で、器面は篋で研磨されている。

62~66・69は広口壺形土器の底部であるが64を除いてすべて上げ底となり、65は底部を穿孔している。121は広口壺形土器のミニチュアで口縁部を欠くが、現高6cmの手づくりの土器である。

長頸壺形土器(61・68・119)

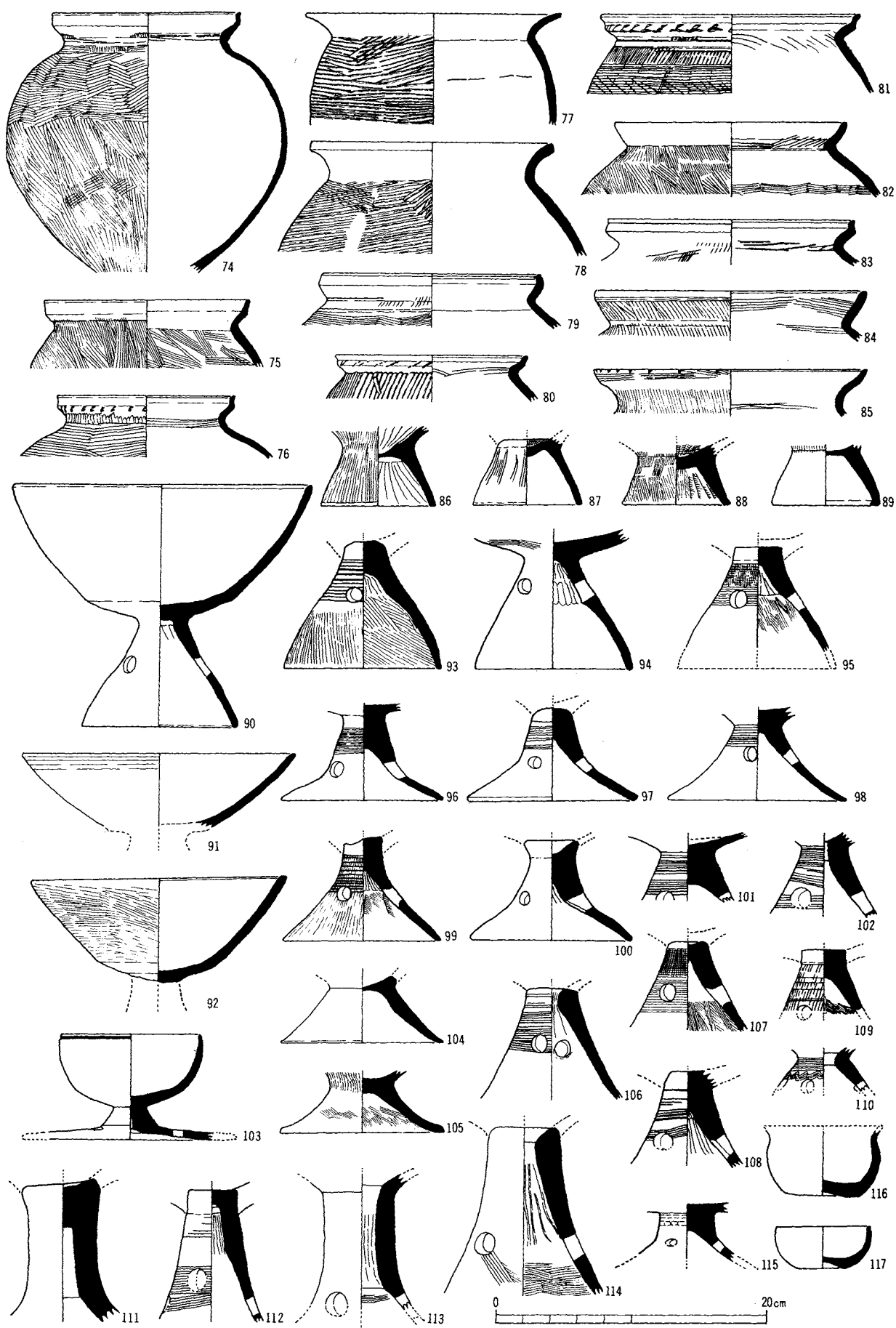
口頸部が内わんし、縦方向の篋研磨で丁寧に仕上げているもので、61は口端上面に凹線が施され、肩にも篋描横線文と櫛描列点文とが配されている。68は口縁部に弧状の列点文が施され、119は頸部に突帯がめぐる。

高杯形土器

A区出土のA・B・C・D類はB地区では認められない。

E類(96~100・115・124) 全形の知れるものはなく、すべて脚部のみで、脚裾が大きく開く。脚高は脚裾端部の径の $\frac{1}{2}$ ほどであり、96・97・100は透孔の高さ一脚部中央一で折り返されるように屈曲して、裾の開き具合が大きくなり、A区C類高杯の脚部がより発達した形と考えられる。98・99・124は滑らかに外方へ裾が大きく開く。すべてに円孔が三方にあき、脚上半部に雑な横線文が施されるもの(96~99・124)と無文のものがある(100)。杯部としては91・92・122・123の形態のものがつくと考えられる。なお92・123の外面は篋で斜めに荒く研磨した上を、さらにタテ方向に細かく研磨して仕上げている。

F類(90・93~95) A区A類高杯を小形にしたような器形のもので、脚高は8cmほどであり脚裾が内わん気味で丸味をもつ。杯部としては、90のように底部と口縁部の境に不明瞭な稜が入る深い形態のものがくるようである。



B区SX1出土土器实测图(1:4)

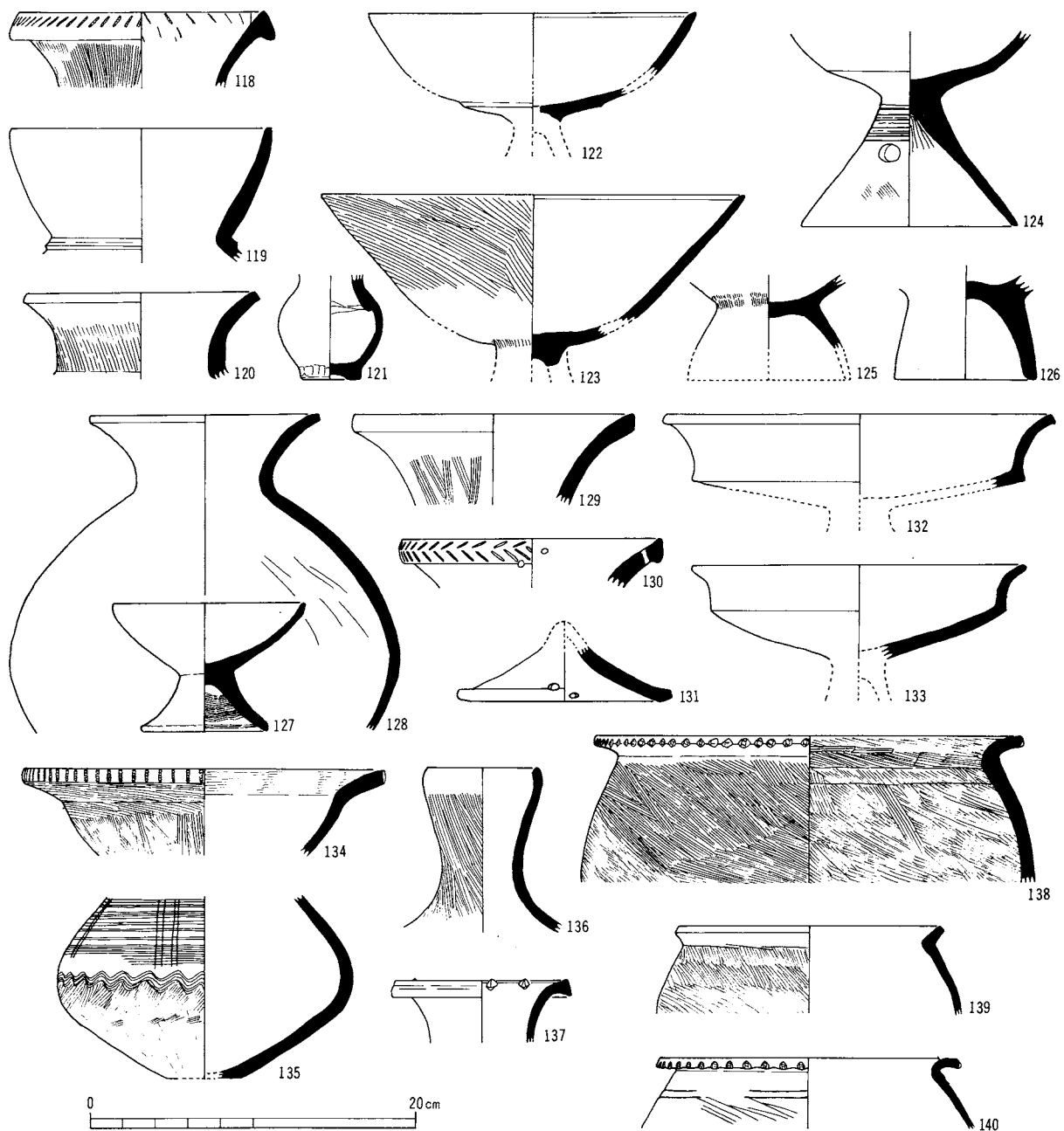
G類 (111・112) 脚部のみで裾を欠くが、細長い脚柱部をもつもので、脚裾は屈曲して開く形をなすと考えられ、111は内面に稜線が入る。

H類 (103) 杯部が碗形を呈し、深さが器高の $\frac{2}{3}$ を占め、脚裾が水平に屈曲して大きく開き、脚裾の径は口縁径を上回る。そして脚裾に2段に4個ずつの円孔をあける独特の器形をなし、篋で細かく研磨して丁寧に仕上げている。

I類 (127) 逆八字形に直線的に開く杯部と、それを小さくして反転したような脚部からなる器形で、透孔も文様もつかない小形の高杯である。

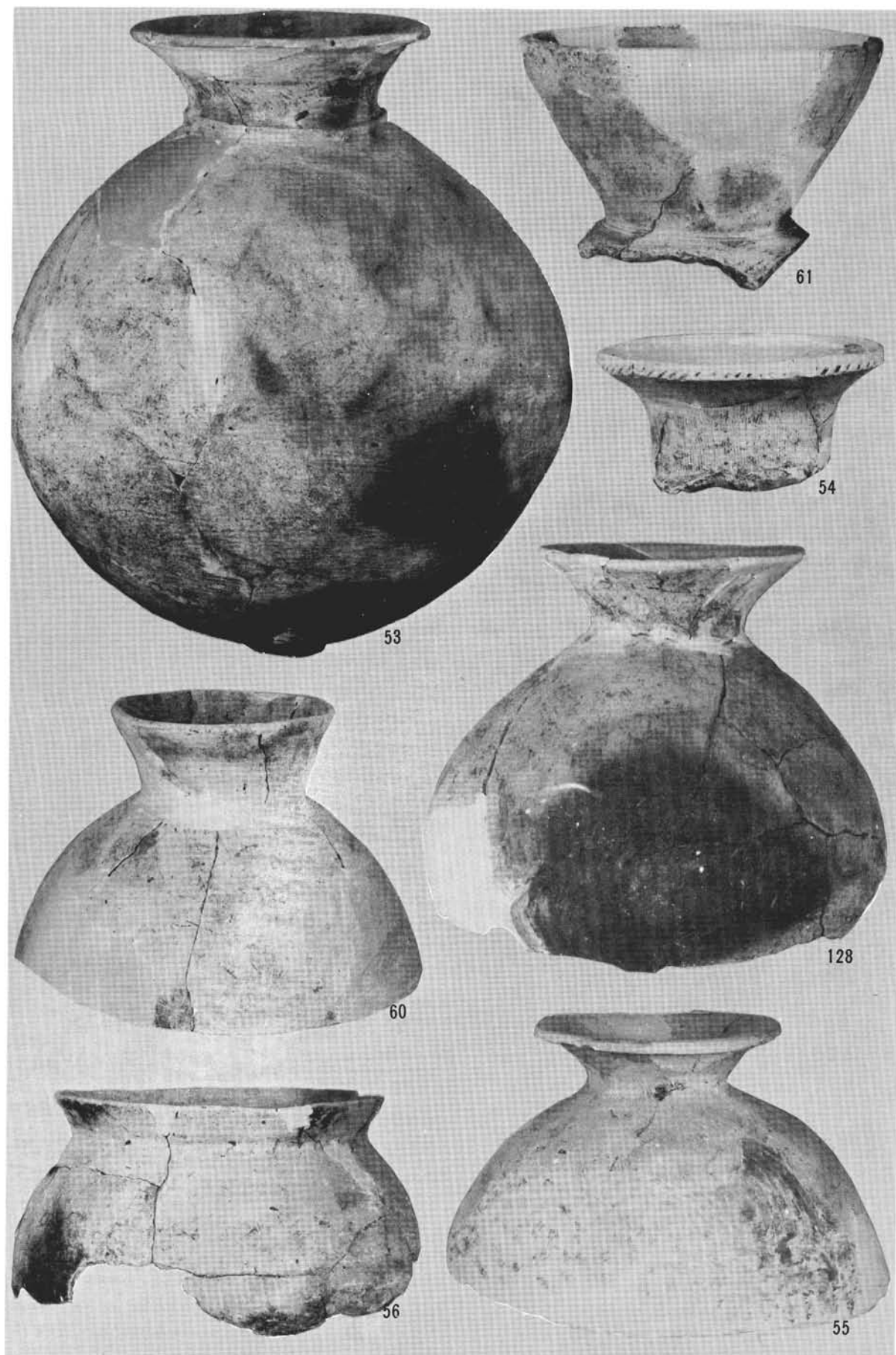
器台形土器 (102・106・110・113・114)

脚部のみで受皿部は不明である。高杯G類と同様な脚部をもつもの (113・114) と小形の脚部

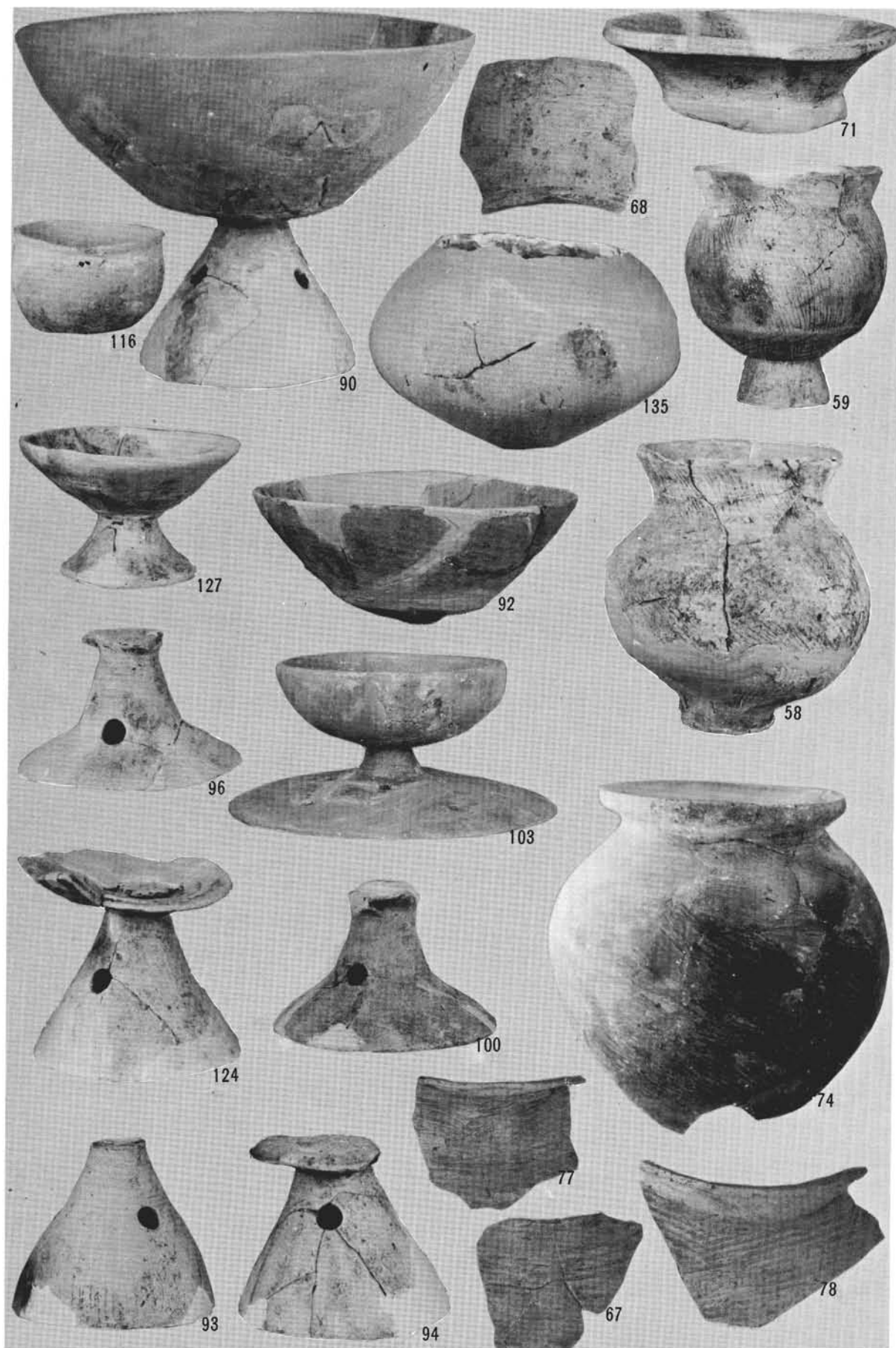


B区出土土器実測図 (1 : 4)

S X 2 : 118~126、S K 10 : 127・128、
S D 18 : 134・135・137・139、S K 19 : 136・138・140



B区出土土器 (1 : 3)



B区出土土器 (1 : 3)

をもつものがある。

甕形土器

A類(74・76・80・81・83) 複合口縁をもつもので、口縁部に篋圧痕文を施すもの(76・80・81)と、口縁部をヨコナデして仕上げるもの(74・75・83)とがある。また、器面調整は刷毛目によるもので81は縦の刷毛目の上に横線文を引いている。

D類(79・82・84・85) 短く外反する口縁部をもち、端部が内わんする器形のもので、85は端部に篋による刻み目が入る。

E類(67・77・78) 器面に水平方向に叩き目残り、肩の張らない器形で、脚台はつかない。67は底部まで水平の叩き目残り、上げ底となる。77は口縁は肥厚せず単純におさまるが、78は肥厚して稜をもつ。

F類(56) 「く」の字形に外反する短い口縁部をもち、端部は丸くおさまる。甕形土器の中では最も大きい器形で、73のような脚台がつくのであろうか。

G類(59) 球形に近い体部をもち、口径よりも胴部の径がやや大きい。口縁部は僅かに外反する程度のものであり、八字形に開く脚台がつく。縦の刷毛目で器面が覆われている。

なお、86～89はA類には必ずつく脚台であり、八字形に開き、89のみ内側へ器壁が突き出る。

鉢形土器(116)

口端を欠くが、口縁部が僅かに外反し、上げ底となる手づくねの土器で内外面を篋で研磨している。

杯形土器(117)

口縁部が内わん気味に立って、端部は丸くおさまり、底部は上げ底となる。

3. C 地 区

小排水路掘削工事中に出土して採取したものばかりで寄道式の土器がほとんどである。

(1) 弥生時代後期前半の土器

広口壺形土器(144～146)

口縁部と底部のみで、144はB区129と同様に口縁部が大きく外反するもので、口端が少し肥厚して稜をもつ。145・146は平底である。

高杯形土器

A類(151～154) B区高杯と同様に口縁部が外反するもので、口縁部に文様の施されるものと154のように無文のものがある。151・153は櫛描波状文であるが、152は半載竹管状の工具で鋸歯文が施されている。

B類(155) 椀状に丸味のある杯部をもち、口端は丸くおさまる。

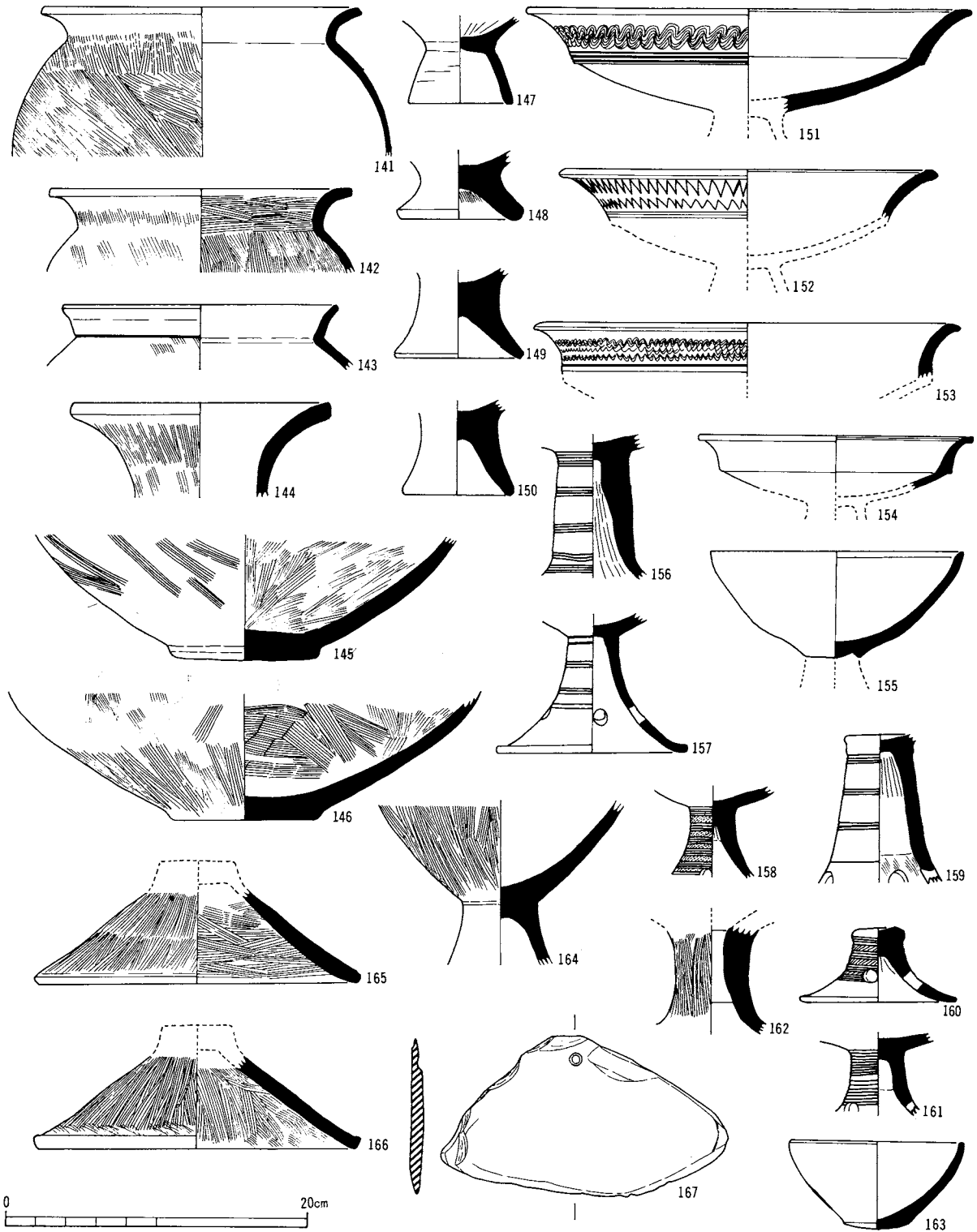
156～161は脚部で、157は脚裾が広がり、4個の透孔があげられ、脚端は稜をもつ。外面は櫛描横線文が4帯入る。156・159は柱状部が157に比べ長いが同様のものであり、また横線文帯の間に

櫛描列点文を配するものもある（158・160）。A・B類の杯部はともにこの種の脚部がつく。ただ160は脚高が低いため台付壺のものであろう。

器台形土器（162）

柱状部のみ、全形は知る由もない。

甕形土器（141・142・143・147）



C区出土遺物（1：4）

141・142は強く口縁部が外反するもので器形がよく似るが、143はわずかに外反する口縁部をもつ。煮沸用器としての甕形土器より、貯蔵用器としての壺形土器の仲間に入れるべきかも知れない。147は甕形土器の脚台部であるが、148～150・164は器壁が厚く台付壺のものと思われる。

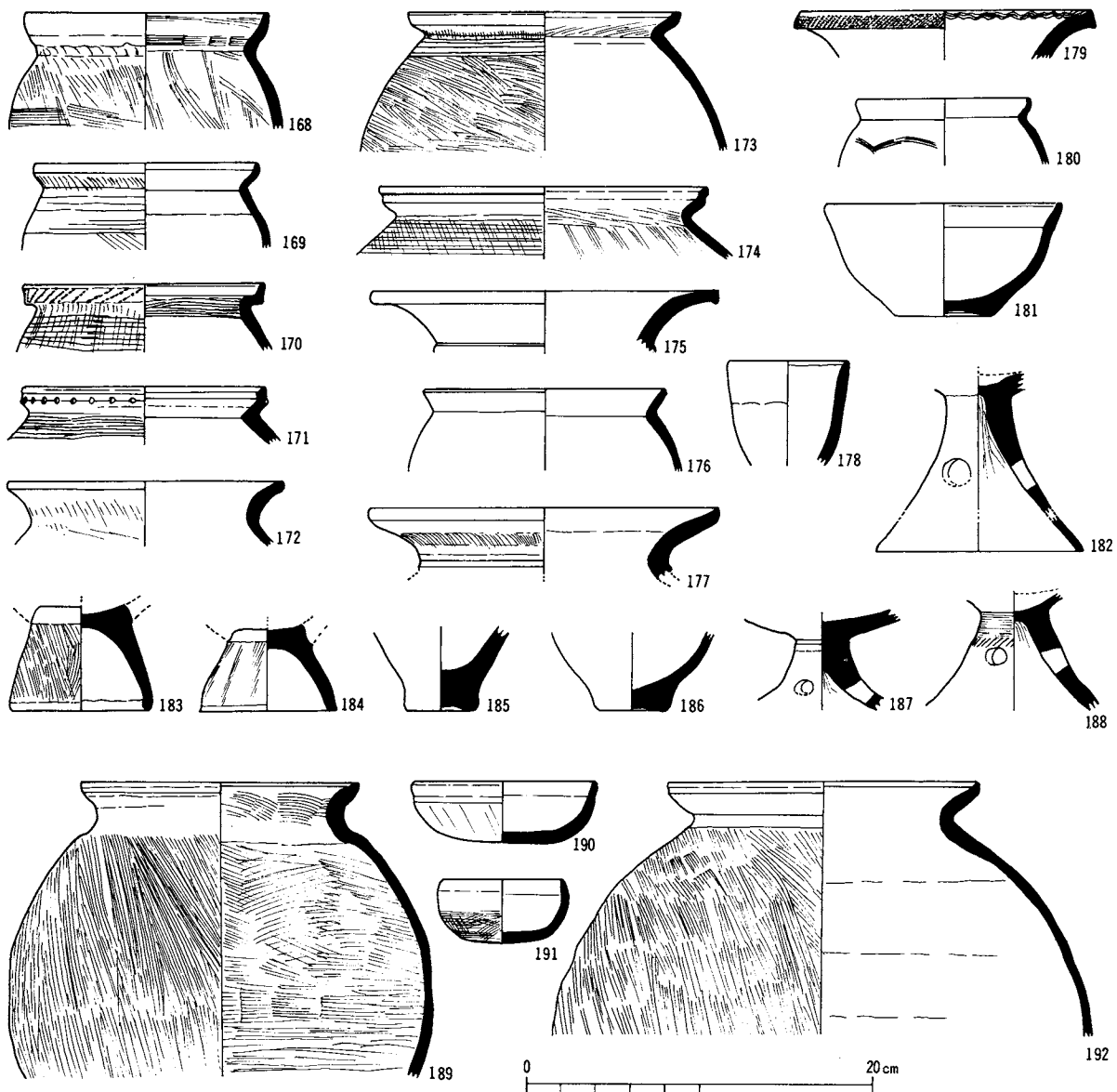
蓋形土器 (165・166)

天井部を欠くが、内外面と刷毛目で仕上げ、165の口端内面には黒く煤が付着しており、甕形土器の蓋と考えられる。

鉢形土器 (163)

口縁部は内わん気味に外に開いて、端部は丸くおさまる。底部も平底とならず丸味をもち、器面は篋で削って仕上げている。

(2) 石 器



D区出土土器実測図 (1 : 4) SB 1 : 168~188
No. 4 土坑 : 189~192

石包丁 (167)

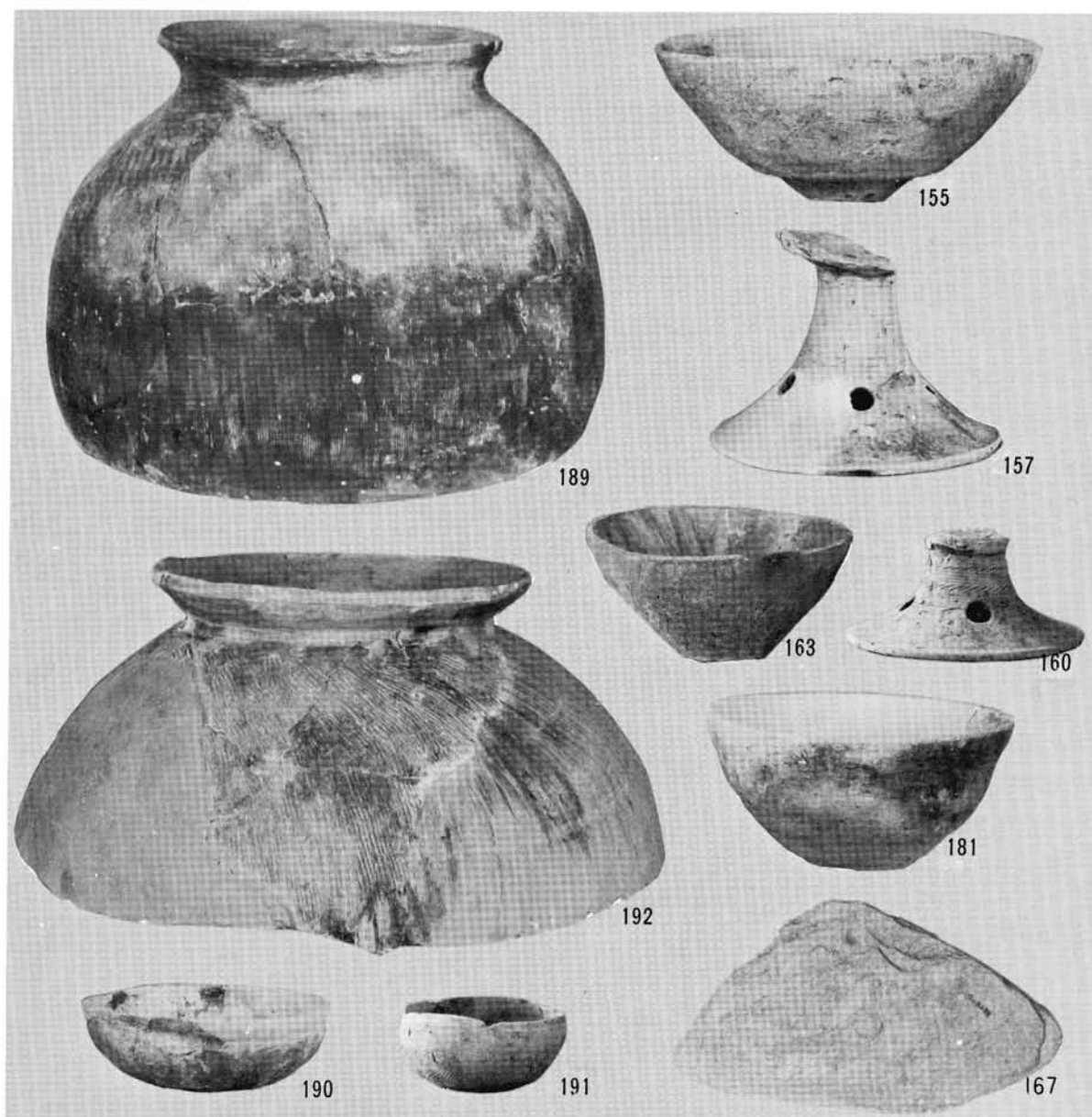
緑色片岩製で、厚さ0.8cm、三角形状をなし、その長辺に当たるところが刃部となり、刃部は弧状にわん曲する。頂点に当たるところに円形の凹みがあって、孔として貫通していない。未製品であろうか。弥生時代後期前半の土器に混じって出土したという。

4. D 地 区

(1) 弥生時代後半期の土器

壺形土器 (175・177～180・185・186)

175・177・179は広口壺で、175・177は突帯が頸部に辛うじて残り、179は口端が肥厚して楕円描列点文と波状文が施される。180は短頸壺で口縁部が内わんし、上腹部に弧状の楕円描文が入る。178は長頸壺で直口の口縁部をもち、弧状の列点文が施されている。185・186は上げ底になるもので小形壺の底部であろう。



C・D地区出土遺物 (1 : 3)

高杯形土器（182・187・188）

裾の広がるもので、いずれも三方に透孔をもち、187は脚裾が屈曲し最も小形であり、188は横線文の下に櫛描列点文が施されている。

甕形土器

A類（170・171・174） 複合口縁をもつものであるが、170は口縁部を櫛描列点文で飾り171には篋圧痕文を施し、174は無文でヨコナデしているのみである。

B類（172・176） 172は口縁部の外反度が強く、176は直線的に開く短い口縁部である。

D類（168・169・173） 口縁部が内わんし、A類のように文様をもつものがなく、すべてヨコナデの仕上げのみで、無文である。

なお、183・184はA・D類の甕形土器の脚台部と考えられ、183は脚端部が内面に折り返されて帯状になる。

鉢形土器（181）

口端が少し外反して内面に稜線が入り、底は上げ底になる。器面はC区163と同様篋で削り、調整は雑である。

（2）古墳時代後期の土師器

いずれも、No.4 試掘坑内の円形状土坑から、かたまって一括出土したものである。

甕形土器（189・192）

ヨコナデによって端部が引き出されて口縁部は丸味をもつ。体部は189が内外面とも、192は外面のみ刷毛目で丁寧に調整されており、192の内面には胎土のツナギ痕が残る。

杯形土器（190・191）

口径は190が11cm、191は7cm、器高はともに3.5cmである。190の口縁部はヨコナデによって外面に稜線が入るが、191は口縁部が内わんしている。

V 結 語

中楽山遺跡は、調査した限りでは弥生時代後期前半の寄道期と後半の欠山期に相当する遺跡で、欠山期の竪穴住居址の構造と方形周溝墓群を明らかにすることができた。遺跡の広がりや想像の域を出ないが、小排水路壁面及び埋管のために掘られた溝の壁面の観察によって、遺構及び遺物包含層が確められた箇所が6箇所あり、それらとA～D地区をつなぐと遺跡地形図のような範囲が推定できる。この推定範囲は15.4m～17mの等高線が段丘上で北々東に延びる地形に合致しており、居住地を段丘上でも縁辺の高所に選定したことが判明する。

B地区の方形周溝墓4基の先後関係は発掘では確認できなかったが、SX1とSX2の出土土器はともに欠山式の同一型式のものであり、SX3とSX4が切り合うコーナーで出土した高杯

杯部は明らかに欠山式に先行する寄道式のものである。また、S X 2 と S X 3 が切り合い、S X 4 と S X 1・S X 2 とは1辺を共有する事実からすれば、S X 3 は寄道期の方形周溝墓と推定され、S X 3→S X 1・S X 2・S X 4 と順序づけられる。この種の方形周溝墓は、南勢地方では伊勢市大藪遺跡^⑥、明和町金剛坂遺跡^⑦につぐ発見であるが、今回も主体部に相当する遺構は確認できなかった。なお、方形周溝墓の内、S X 1 出土土器と D 地区 S B 1 の土器とは器形がよく類似し、時期的に並行すると考えられるが、前者は S X 1 溝内が30cmほど埋まった段階で遺棄された状態で検出されたものであって、直ちに S X 1 と D 区 S B 1 が並行したものとは即断できない。

出土土器は、尾張・三河地方の弥生時代後期の土器の様相と同様で、寄道期及び欠山期に相当するものである。B 区からは叩き目を有する甕形土器の出土もあって畿内地方との関連もうかがわれる。A 地区、B 地区 S X 1・S X 2・S K 10、そして D 地区 S B 1 出土の土器はすべて欠山式土器の範疇に一括される。しかし、ここで多量に土器を出した A 地区 S B 1 出土土器と B 地区 S X 1 出土土器を比較した場合、類似する要素ももつかわら、いくつかの相違点をあげることが出来る。まず、壺形土器において、ともに無文化しているとはいえ、S B 1 のものにはまだ、櫛描横線文や列点文あるいは篋圧痕文を装飾文として用いているが、S X 1 のものにはほとんど施されていない。高杯形土器は S B 1 の主流であった A 類は S X 1 では全く検出されず、脚部が矮少化され、裾の大きく開く E 類高杯がその大半を占める。中には、儀器化が一段と進んだ器形と見られる高杯 103 も出土している。甕形土器においては、S X 1 は本来の S 字状口縁土器よりや、口端が立つ複合口縁を有するものがその主流を占める。このような変化の中で、最も目をひくのが高杯形土器、わけてもその脚部の変化である。裾の大きく広がる E 類高杯の脚部の形態は、鳥羽市大畑遺跡^⑧ S K 1 出土の高杯とよく類似する。もっとも、S K 1 出土の一括土器は小形丸底壺及び S 字状口縁甕形土器を伴い、柳ヶ坪式の壺形土器も含まれて、古墳時代前期の古式土師器の範疇に入るものである。S X 1 出土の E 類高杯だけを取り上げれば、古式土師器の範疇に入れても差し支わりはなかろうが、S X 1 出土土器には、古式土師器のメルクマールともいうべき小形丸底壺は伴出せず、甕形土器も S 字状口縁甕形土器に昇化していない。しかし、高杯形土器 E 類及び甕形土器 A 類は古式土師器への傾斜を強めた器形といえる。かつて、久永春男氏は欠山期を、(1)欠山式土器に前段階の土器が共存する段階、(2)純粹の欠山式土器の段階、(3)欠山式土器に古式土師器が伴出し始める段階、の3段階に細分出来得ると述べられたことがある^⑨。この見解に従えば、A 区 S B 1 出土土器は(2)の段階、つまり典型的な欠山期の段階であり、B 区 S X 1 出土土器は欠山期(3)の段階に相当する。弥生式土器から古式土師器への移行については統一された見解はないが、小形丸底壺を古式土師器のメルクマールとすることには異存はない。今、南勢地方に限れば、欠山期から古式土師器への移行として、A 区 S B 1 土器→B 区 S X 1 土器→大畑遺跡 S K 1 土器の図式が考えられる。この変遷が、妥当なものかどうかは今後の検討にまきたい。

(下村登良男)

- ① 地形については、山本威「伊勢市周辺の地形と地質」（南勢バイパス埋蔵文化財調査報告 三重県教育委員会 1973）に拠った。
- ② 村山邦彦「小社遺跡」歩跡第2号 皇学館大学考古学研究会 1972
- ③ 1973年度、三重県教育委員会により発掘調査
- ④ 吉水康夫「大藪遺跡」南勢バイパス埋蔵文化財調査報告 三重県教育委員会 1973
- ⑤ 伊藤久嗣「高向遺跡」 同上
- ⑥ ④に同じ
- ⑦ 谷本鋭次・山沢義貴「金剛坂遺跡発掘調査報告」 明和町教育委員会 1971
- ⑧ 下村登良男・村上喜雄「おばたけ遺跡発掘調査報告」 鳥羽市教育委員会 1972
- ⑨ 久永春男「各地域の弥生式土器・東海」日本考古学講座4 1955

三重県埋蔵文化財調査報告 15

埋蔵文化財発掘調査報告

1973年3月31日

発行 三重県教育委員会

印刷 津市栄町2丁目
東亜印刷有限公司

昭和48（1973）年3月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。